

浦ノ田A・B遺跡

—九州国立博物館建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査—

福岡県文化財調査報告書

第 126 集

1996

福岡県教育委員会

浦ノ田A・B遺跡

—九州国立博物館建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査—

福岡県文化財調査報告書

第 126 集

序

本書は、福岡県教育委員会が福岡県総務部国立博物館対策室から執行委任を受けて実施した国立博物館建設予定地内の事前の発掘調査の記録であります。

これまで福岡県では、官民一体となり、国立博物館を「九州の太宰府」に誘致する運動を強く展開して参りました。おかげさまで、昨年の12月には平成8年度政府予算要求において、九州を特定した調査費がつきました。建設地を太宰府に絞り込んではいませんが、九州知事会もすでに太宰府への誘致を決めておりますので、まさにあと一步のところまで来たのではないかと考えております。

県といたしましても、国立博物館を核として、全体として「アジア学術・文化交流センター（仮称）」の整備構想の策定あるいは、いつでも建設予定地の造成に着手できるよう各種の調査を行うなど、受入れ体制に万全を期しております。今回の埋蔵文化財の発掘調査も、その事前の調査として実施したものであります。

調査の結果は、小規模ではありますが、縄文時代早期や晩期の集落跡をはじめ、中世の集落跡などが発見されました。特に、この地域では少ない縄文時代の集落跡の発見は大きな成果がありました。

発掘調査の記録としては、決して十分なものではありませんが、本書を通して地域の文化財や歴史に対する認識と理解を深める一助になれば幸いです。

なお、発掘調査に当たっては、数々のご指導・ご協力を頂いた地元の方々をはじめ、関係各位に対して心から感謝申し上げます。

平成8年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安常喜

例　　言

1. 本書は、平成7年度に福岡県教育委員会が福岡県総務部国立博物館対策室から執行委任を受けて実施した国立博物館建設予定地内の事前の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測は、井上裕弘、石山勲が行い、星野恵美、丸山喜代子氏の協力を得た。写真の撮影は井上が行った。
3. 出土遺物の整理は、岩瀬正信氏の指導のもとに九州歴史資料館で実施した。
4. 出土遺物の写真撮影は、九州歴史資料館の北岡伸一氏が行った。実測は井上の他に、九州歴史資料館の杉原敏之、甘木発掘調査事務所の西田美代子、辻啓子、岡泰子、原富子氏の協力を得た。
5. 製図は、甘木発掘調査事務所の秋吉邦子氏の協力を得た。また、遺構図の断面作成は渡辺輝子氏の協力を得た。
6. 本書の執筆は、主に井上が行い、石器の項を杉原氏に執筆して頂いた。
7. 本書の編集は、井上が行った。

本文目次

I 調査の経過	1
II 位置と環境	4
III 浦ノ田A遺跡の調査	5
1. 土 壤	5
2. 溝状遺構	5
3. 表探資料	10
IV 浦ノ田B遺跡の調査	12
1. 旧石器・縄文時代の遺構と遺物	12
(1) 旧石器時代の石器	12
(2) 集石炉跡	14
(3) 落とし穴遺構	16
(4) 土 壤	16
(5) 縄文時代の遺物	19
2. 古墳・歴史時代の遺構と遺物	20
(1) 墓穴遺構	20
(2) 挖立柱建物跡	20
(3) 大形土墳	24
(4) 溝状遺構	25
(5) ピット及び包含層出土の遺物	30
V おわりに	35

図版目次

本文対照頁

図版 1 (1) 国立博物館建設予定地と浦ノ田A・B遺跡周辺航空写真	1
図版 2 (1) 浦ノ田A・B遺跡周辺航空写真①(南から)	4
(2) 浦ノ田A・B遺跡周辺航空写真②(北から)	4

浦ノ田A遺跡

図版 3 (1) 浦ノ田A遺跡発掘区全景(北から)	5
(2) 発掘区南端部全景(南から)	5
図版 4 (1) 土壌(東から)	5
(2) 発掘区中央部全景(北東から)	5
図版 5 (1) 1~4号溝全景(北東から)	5
(2) 4号溝と杭列(北東から)	9
図版 6 (1) 4号溝内杭列(北から)	9
(2) 発掘区北端部全景(北から)	9
図版 7 (1) 5号溝全景(北東から)	9
(2) 6号溝全景(北から)	10
図版 8 (1) 溝出土土器①	6
(2) 溝出土土器・木器・木の実	8
図版 9 (1) 溝出土土器②	9
(2) 溝出土土器と表探資料	10

浦ノ田B遺跡

図版 10 (1) 浦ノ田B遺跡発掘区全景(南西から)	12
(2) 浦ノ田B遺跡発掘区近景(南西から)	12
図版 11 (1) 発掘区東端部全景(南東から)	12
(2) 発掘区中央部全景(南東から)	12
図版 12 (1) 2号溝全景(東から)	12
(2) 2号・4号溝(東から)	12
図版 13 (1) 4~6号溝と5号掘立柱建物跡(東から)	12
(2) 1号集石炉跡(南から)	14
図版 14 (1) 2号集石炉跡(南西から)	16

(2)	3号集石炉跡（東から）	16
図版 15	(1) 落とし穴遺構（西から）	16
	(2) 1号土壤（東から）	16
図版 16	(1) 2号土壤（北から）	18
	(2) 3号土壤（南東から）	18
図版 17	(1) 1号掘立柱建物跡（南から）	20
	(2) 2号掘立柱建物跡（南東から）	23
図版 18	(1) 3号掘立柱建物跡（北から）	24
	(2) 4号掘立柱建物跡（南から）	24
図版 19	(1) 5号掘立柱建物跡（南東から）	24
	(2) 1号堅穴（東から）	20
図版 20	(1) 2号堅穴（東から）	20
	大形土壤（北から）	24
図版 21	(1) 1号溝と溝1-3土層断面（南西から）	25
	旧石器時代の石器・研磨したナイフ形石器の拡大	12
図版 22	(1) 繩文土器と石器	18
	(2) 繩文時代の石器	15
図版 23	(1) 大形土壤・ピット出土土器	25
	(2) 溝出土土器・瓦①	27
図版 24	(1) 溝出土土器・瓦②	28
	(2) 包含層出土土器	30
図版 25	(1) 包含層出土土器・瓦	33
	(2) ピット及び包含層出土土器	33

挿 図 目 次

第 1 図	国立博物館建設予定地と浦ノ田A・B遺跡周辺地形図（1/3,000）	2
第 2 図	九州国立博物館誘致対策調査特別委員会視察	3
第 3 図	周辺遺跡分布図（1/25,000）	4
浦ノ田A遺跡		
第 4 図	浦ノ田A遺跡遺構配置図（1/200）	折込み

第 5 図 土壌実測図 (1/30)	5
第 6 図 溝出土遺物実測図 1 (1/3)	6
第 7 図 4号溝内杭列実測図 (1/60)	7
第 8 図 木器実測図 (1/2・1/4)	8
第 9 図 5号溝内土層断面図 (1/40)	9
第 10 図 溝出土遺物実測図 2 (1/3)	9
第 11 図 石器実測図 (2/3)	10
第 12 図 表採土器・土製品実測図 (1/3)	10
第 13 図 発掘風景	11

浦ノ田B遺跡

第 14 図 浦ノ田B遺跡遺構配置図 (1/200)	折込み
第 15 図 旧石器時代の石器実測図 (2/3)	13
第 16 図 集石炉跡実測図 (1/30)	14
第 17 図 石器実測図 (2/3)	15
第 18 図 落とし穴遺構実測図 (1/30)	16
第 19 図 土壌実測図 (1/30)	17
第 20 図 繩文土器・石器実測図 (1/3)	18
第 21 図 竪穴遺構実測図 (1/40)	21
第 22 図 1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	22
第 23 図 2・3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	23
第 24 図 4・5号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	24
第 25 図 大形土壌実測図 (1/60)	25
第 26 図 大形土壌出土土器実測図 (1/3)	25
第 27 図 1号溝・溝1-3土層断面図 (1/40)	26
第 28 図 溝出土遺物実測図 1 (1/3)	27
第 29 図 溝出土遺物実測図 2 (1/3)	28
第 30 図 ピット内出土土器実測図 (1/3)	31
第 31 図 包含層出土土器実測図 (1/3)	32
第 32 図 包含層・表採遺物実測図 (1/3)	33
第 33 図 A1・2トレンチ出土土器実測図 (1/3)	34
第 34 図 中世集落の変遷図 (1/400)	36

I 調査の経過

浦ノ田A・B遺跡の調査は、現在、福岡県が官民一体となり誘致を進めている国立博物館建設予定地の事前の発掘調査として実施されたものである。

平成5年12月、福岡県総務部国立博物館対策室より国立博物館建設予定地内の文化財有無について、県文化課長あてに協議がなされた。約170,000m²もある予定地内には、既に周知の遺跡として浦ノ田A遺跡と浦ノ田B遺跡が登録されており、予定地はさらに広大であるため、遺跡の規模と文化財の有無を確認するための試掘調査が必要である旨を回答した。

それを受け、平成7年1月30日から2月8日の間で試掘調査を実施した。建設予定地内は、その大半が山林のため、事前に樹木の伐採を行い、その後、重機や人力により丘陵上と谷部を中心として19ヶ所にトレンチを設定して試掘調査を行った。その結果は、丘陵上には全く文化財は存在せず、谷部にあたる2ヶ所から中世の遺構・遺物が検出された。確認された調査対象地は、既に周知されていた浦ノ田A遺跡と浦ノ田B遺跡に基本的に対応するものであることも再確認することができた。

従って、事前の本格的な発掘調査が必要な対象地は、約5,000m²であることも明らかとなり、その旨を国立博物館対策室に文書で回答した。その結果、平成7年度に発掘調査を実施することで協議が成立した。

発掘調査は、平成7年8月28日から開始し、真夏は避けたものの残暑厳しい日が例年になく続いた、また、谷部ということもあって、風通しも悪く蒸し暑さに悩まされる調査となった。調査が終了したのは秋も終わりの11月15日であった。調査中には九州国立博物館誘致対策調査特別委員会の視察を受け、激励された。

調査の結果は、全体として希薄ではあったが、浦ノ田A遺跡からは中世の土壙1基と溝6条が検出された。浦ノ田B遺跡からは縄文時代早期のものと思われる集石炉跡3基をはじめ、ほぼ同時期のものと思われる落とし穴遺構1基と土壙2基、晩期の土壙1基、中世のものと思われる竪穴遺構2基、掘立柱建物跡5棟、大形の土壙1基、排水と区画を意識した溝が9条、他に多数のピットが検出された。特に、この地域では少ない縄文時代の小規模ではあるが、集落跡が発見されたことは大きな成果であったといえる。また、溝で区画された中世期の小集落の発見も興味深いことである。

なお、発掘調査にあたっては、市の事業の忙しい中にもかかわらず太宰府市教育委員会所属の発掘作業員を派遣して頂くなど、市教育委員会には多大なご協力を得た。また、国立博物館対策室の方々をはじめ、九州歴史資料館の石松好雄・宮小路賀宏・栗原和彦氏には調査全般にわたって、測量杭の設定では、九州歴史資料館の横田賛次郎・小川泰樹氏、実測作業では国立博物館対策室石山歎・星野恵美・丸山喜代子氏のご協力を得た。とりわけ、蒸し暑い中の発



第1図 国立博物館建設予定地と浦ノ田A・B遺跡周辺地形図 (1/3,000)

掘調査に参加された地元の方々の多大なご支援・ご協力に対して、記して謝意を表します。

調査関係者は下記のとおりである。

福岡県教育委員会

総括

教育長	光安 常喜
教育次長	松枝 功
指導第二部長	丸林 茂夫
文化課長	松尾 正俊
文化課参事	柳田 康雄
文化課長補佐	元永 浩士
庶務・管理	
文化課管理係長	柴田 恭郎
文化課主任主事	高田 裕康
調査	
文化課参事補佐	井上 裕弘

発掘作業員

梅津登美子	木村 末子	陶山 小春	陶山よしみ	田中 幸子
手島 久子	花牟禮恵子	増野 芳枝	森 由美子	和田ハマ子
和田 京子	福島 保子	内野 紗子	上原 洋美	



第2図 九州国立博物館誘致対策調査特別委員会視察

II 位置と環境

浦ノ田A・B遺跡は、福岡県太宰府市石坂4丁目989、1000-1番地に所在する。

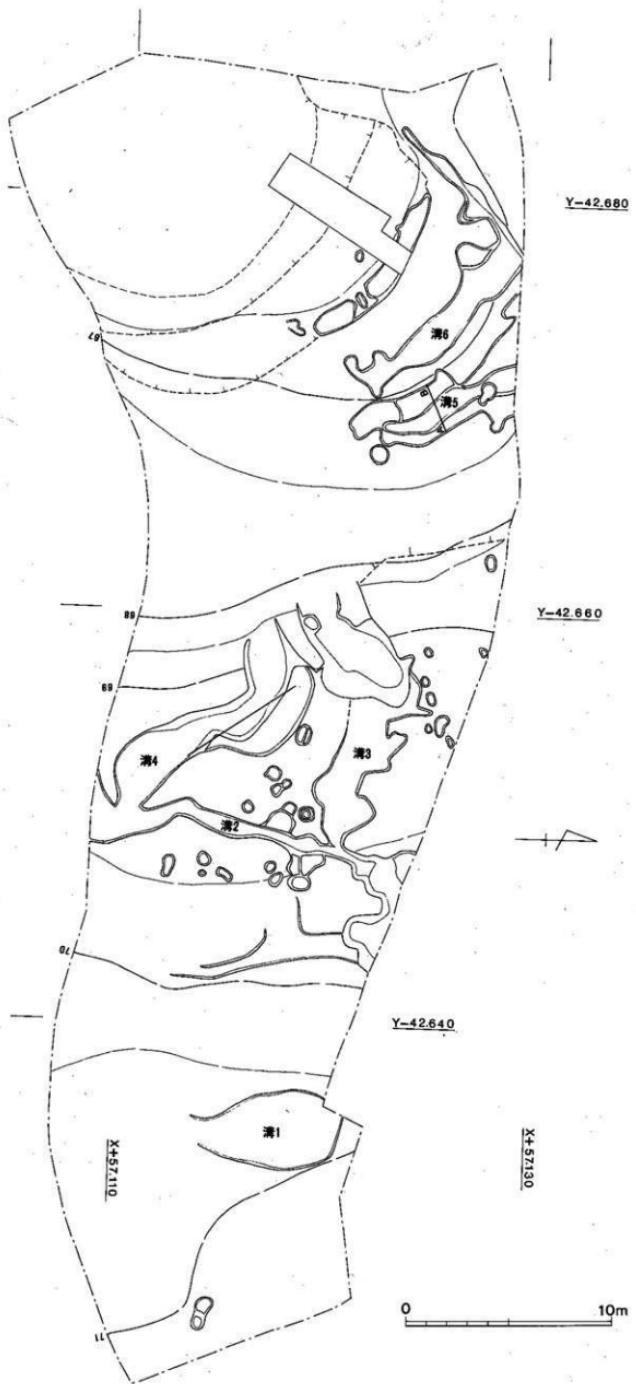
遺跡は、三郡山地の一つである標高829mの宝満山から南西に派生する丘陵に囲まれた谷部と谷部より一段高い丘陵裾部に形成されている。

遺跡の周辺には、縄文時代、古墳時代の遺跡もあるが、とりわけ、奈良から平安、鎌倉、室町時代へと続く遺跡が多数分布している(第3図)。縄文時代の遺跡は、いまだ少なく縄文時代早期の原遺跡と小賀谷遺跡の2ヶ所が知られているだけである。最近調査された原遺跡からは、浦ノ田B遺跡と同様の早期押型文土器の小集落が発見されている。また、本遺跡の中心時期である鎌倉時代の遺跡は、調査され、その実態が明らかなものは多くはないが、北から原山2号経塚、普現遺跡、三浦A遺跡、原遺跡(13)、浦之城跡、醍醐A・B遺跡、筑紫工業裏山遺跡、太宰府天満宮境内地墳墓群、地蔵原遺跡などと、最も多くの遺跡が形成されている。これは安楽寺(太宰府天満宮)の隆盛期とも係る事象と思われ、興味深い。従って、浦ノ田A・B遺跡の形成も安楽寺との係りの中で成立した可能性は高いと思われる。



第3図 周辺遺跡分布図(1/25,000)

1. 浦ノ田A遺跡
2. 浦ノ田B遺跡
3. 太宰府天満宮境内地墳墓群
4. 原遺跡
5. 小賀谷遺跡
6. 地蔵原遺跡
7. 宝満山経塚
8. 三浦A遺跡
9. 安樂寺経塚
10. 安樂寺(太宰府天満宮)
11. 普現遺跡
12. 原山2号経塚
13. 原遺跡
14. 浦之城跡
15. 醍醐B遺跡
16. 筑紫工業裏山遺跡
17. 醍醐A遺跡
18. 若屋城
19. 中ノ峰遺跡



第4図 浦ノ田A道路構造配図 (1/200)

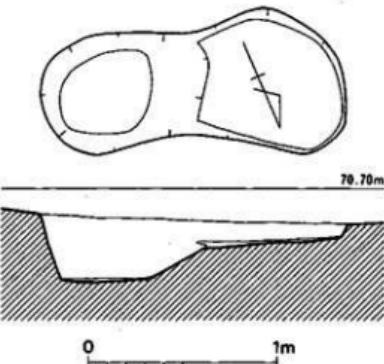
III 浦ノ田A遺跡の調査

遺跡は谷部に存在し、南から北へ棚田状に開墾され、以前は水田として利用されていたと言われている。そのこともあってか、遺構の遺存状態は全体に浅く、かなり削平されており、遺構としては中世の土壙1基と6条の溝状遺構が検出されただけで、極めて希薄な遺跡であった。

しかし、遺物の量も中世期の遺物などが整理箱半ケース程度と少ないとからすれば、もともと小規模で短時期に形成された遺跡であったと言えるのかもしれない。

1. 土 壙（図版4、第5図）

発掘区南端部から検出された不整椭円形プランの土壙で、底面は二段掘状をなしている。埋土中からは少量の炭化物と角砾が数個、同安窯系の白磁碗破片1点が出土した。その白磁碗は担当者の不注意で紛失してしまったことをお詫びします。規模は東西最大部で73cm、南北161cm、深さは深い南側で35cmを測る。



第5図 土壙実測図(1/30)

2. 溝状遺構

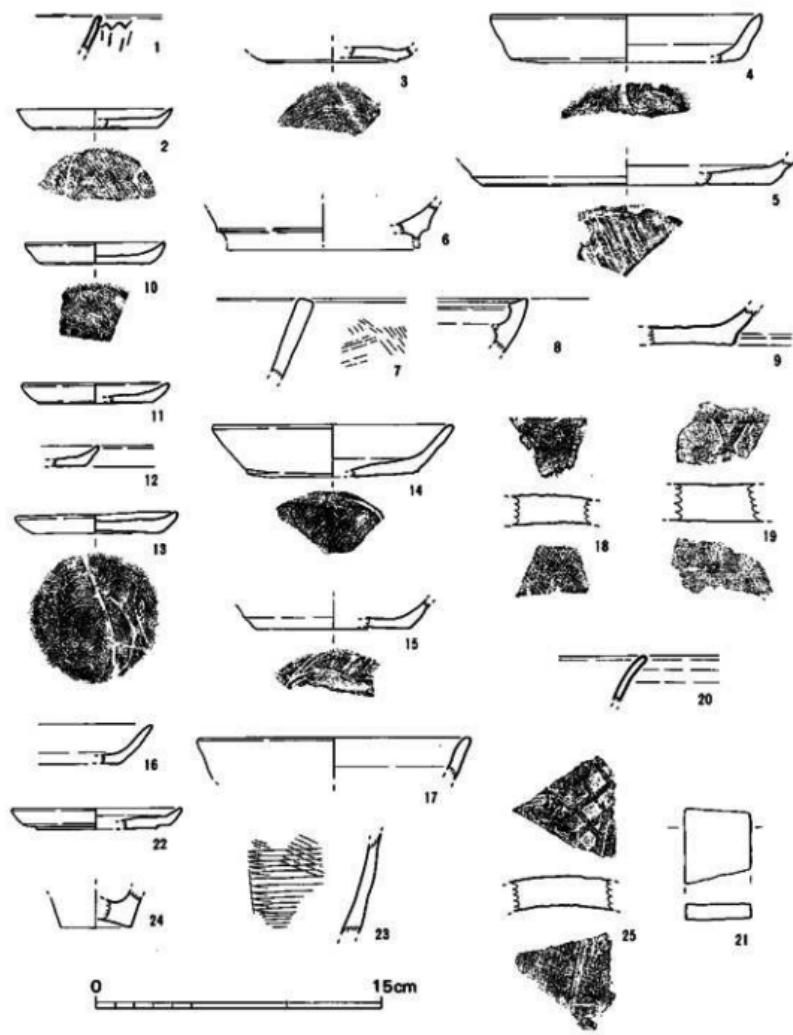
1号溝（図版3、第4図） 発掘区南端、1号土壙の北側から検出された東西に走る幅広の浅い溝で、西側は削平のためか消失している。確認部分での長さは7.5m、幅は最大部で3.8m、深さ15.6cmを測る。埋土中からは少量の炭化物と土師器小片、青磁片が若干出土しただけである。時期は中世期と思われる。

出土遺物（図版8、第6図）

磁器（1） 青磁碗の小破片で、杯部外面にはヘラ描きの崩れた蓮弁文が施されており、明代の青磁と思われる。釉色は黄緑色、胎土は灰白色を呈している。

2号溝（図版5、第4図） 発掘区中央部から検出された東西に走る溝で、底面の傾斜から見ると東から西に走行していることが判る。確認した長さは15.7m、幅は最大部で6.2m、最小部で0.6m、深さは25~31cmを測る。埋土中からは少量の土師器・須恵器・青磁片などが出土地だけである。時期は土師器の示す13世紀末と思われる。

出土遺物（図版8、第6図）



第6図 溝出土遺物実測図1 (1/3)

土師器（2～7） 2・3は小皿の破片資料で、調整は器面の風化が著しいため不明だが、底部の切り離し手法は2が廉状圧痕、3が糸切りである。復原口径は2が8.2cm、底径は2が6.6cm、3が7cm、器高は2が1.1cmを測る。

4・5は杯の破片資料で、5は特に大型の杯である。いずれも調整は体部内外ヨコナデで、底部の切り離しは4が糸切り、5は廉状圧痕を残している。復原口径は4が14.4cm、底径は4が12.2cm、5が15.2cm、器高は4が2.5cmを測る。

6は高台付の椀の高台部付近の破片資料で、内外ともナデ調整で仕上げている。色調は淡黄茶色を呈し、焼成も良好である。

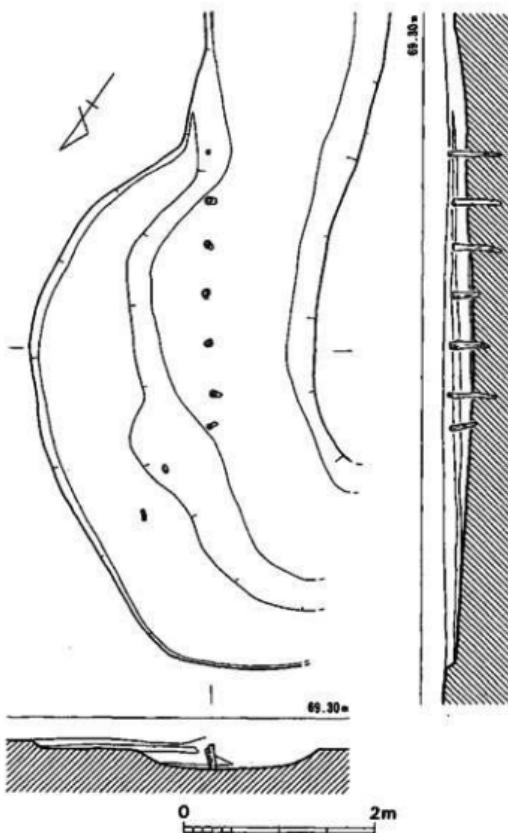
7は土鍋の口縁部付近の小破片で、外面には煤の付着が見られる。調整は体部外面刷毛、内面と口縁部内外はヨコナデで仕上げている。

陶器（8） 口縁部内面に2条の凸帯が巡る鉢の口縁部小破片で、大きさは不明である。

磁器（9） 青磁の壺の底部破片で、釉調は淡黄緑色、胎土は灰色を呈す。

3号溝（図版5、第4図）

2号溝の南東部から派生する南北に走る溝で、途中で西側に緩やかに曲がり北端部は溜り状をなし深くなるものの、端部は水田の開削で消失している。溝の底は南から北に緩やかに傾斜している。2号溝との新旧関係は不明であるが、出土遺物からすれば、ほぼ同時期に存在した溝と思われる。埋土中からは土師器・磁器・瓦・磁石などの小破片が出土した。時期は13世紀末頃と思われる。



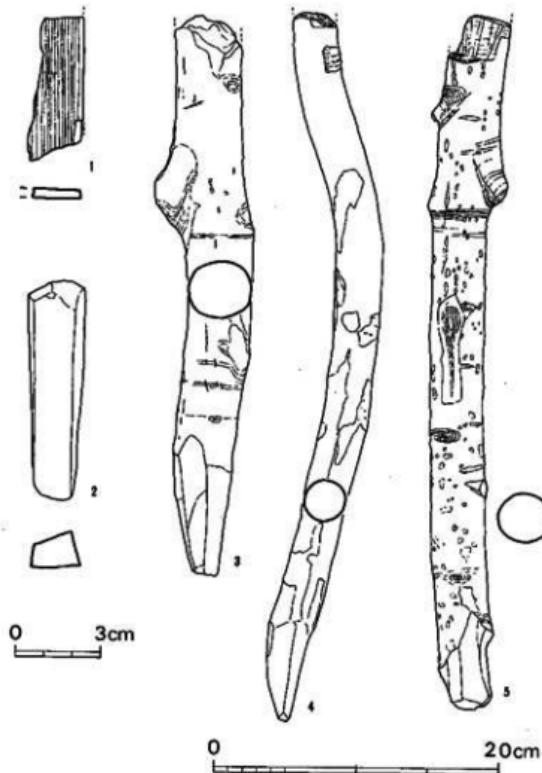
第7図 4号溝内杭列実測図 (1/60)

出土遺物（図版8・9、第6図）

土師器（10～17） 10～13は小皿で、調整は体部内外ヨコナデ、底部の切り離しは12が不明の他はすべて糸切りである。口径は10が7.4cm、11が7.8cm、13が8.5cm、底径は10が5.8cm、11が6cm、13が6.6cm、器高は10・13が1.1cm、11が1.05cmである。

14～17は杯の破片資料である。調整はいずれも体部内外ヨコナデで、底部の切り離し手法は14・15が糸切り、16は廉状圧痕を残している。復原口径は14が12.8cm、17が14.3cm、底径は14が9cm、15が8.2cm、器高は14が2.8cm、16が2.1cmを測る。

磁器（20） 白磁の皿で、釉調は黄白色で、口縁端部内面は搔き取られている。胎土は乳白



第8図 木器実測図(1/2・1/4)

色を呈す。

瓦（18・19） いずれも平瓦の小破片で、外面のタタキは18が複線の斜格子目文、19が斜格子目文、内側は両者とも布目を残している。

砥石（21） 仕上げ砥の破片で、現存長3.9cm、幅3.5cm、厚さ0.8cmを測る。

4号溝（図版5、第4・7図） 3号溝と対峙する2号溝の南西部から派生した西から北東に走る溝で、北東部で強く北側に屈折している。北端部は3号溝と同様に水田の開削により消失している。溝内中央南側からは細木と竹を使用した7本からなる杭列が検出された。その間隔は50cm前後と一定しており、ほぼ直線的に並んでいるが、いかなる機能の杭列かは判らない。埋土からは少量の土師器・陶磁器・瓦片をはじめ、板状の木器小片、松の樹皮や幼果などが少量出土している。時期は土師器の示す13世紀末と思われる。

出土遺物（図版8・9、第6図）

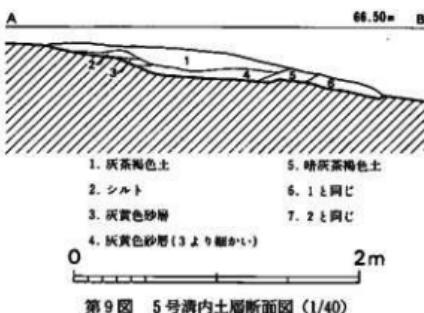
土師器（22・23） 22は小皿で、内底部ナデ、体部内外ヨコナデ、底部の切り離しは風化のため不明である。復原口径は9cm、底部径6.4cm、器高は1.1cmを測る。

23は土鍋の胴部破片で、胴部外面ナデ、内面は刷毛調整で仕上げている。

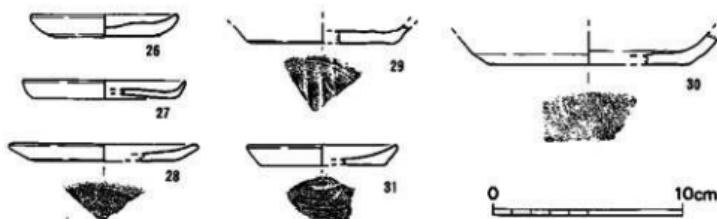
陶磁器（24） 盆の底み底の底部破片で、内外とも露胎のままである。胎土は灰色を呈し、焼成も良好・堅緻である。復原底径は3.6cmを測る。

瓦（25） 平瓦の小破片で、外面は斜格子目のタタキ、内面は布目をナデ消している。

木器（第8図） 1は木札状の正目の板で、厚さは3mm、現存部での長さ5cm、幅2.9cmを測る。2は楔状の木器で、長さ7.7cm、最大幅2cm、厚さ最大部で1.7cmを測る。3～5は杭列



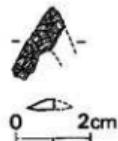
第9図 5号溝内土層断面図 (1/40)



第10図 溝出土遺物実測図 2 (1/3)

に使用された杭で、いずれも樹種は桜の木を樹皮のまま用いている。現存部での長さは、3が39.5cm、4が50cm、5が48.7cm、杭の径は3が最大で4.6cm、4が最小で3.3cmを測る。

5号溝（図版7、第4・9図） 発掘区北側、3号溝の北東部から検出された北東から南西に走る溝で、確認部分で全長7m、幅は1.3~2.4m、深さは浅く25cmを測る。埋土からは少量の土師器・瓦質土器片・石鎌片などが出土しただけである。時期は土師器の示す14世紀初めと思われる。



第11図 石器
実測図(2/3)

出土遺物（図版9、第10図）

土師器（26~28） いずれも小皿の破片資料で、調整は内底部ナデ、体部内外はヨコナデ、底部の切り離しは全て糸切りである。27は内外とも丹塗りした作りの良い土器である。復原口径は26が7.8cm、27が8.6cm、28が10cm、底径は26が5.8cm、27が7.6cm、28が7.4cm、器高は26が1.2cm、27が1cm、28が0.9cmを測る。

6号溝（図版7、第4図） 5号溝の北側から検出された南西から北西にL字状に走る溝で、谷部の地形に沿って掘削されている。溝底は西から北に傾斜しており、北側の溝には滝り部を形成している。南側の溝に対して北側の溝は狭く深い溝で、断面も南側の溝が緩やかな台形状をなすのと異なり、V字状を呈している。埋土からは少量の土師器片が出土しただけである。全長は19m、幅は0.3~1.9m、深さは20~38cmを測る。時期は土師器の示す13世紀頃と思われる。

出土遺物（図版9、第10図）

土師器（29~30） いずれも杯の破片資料で、復原底径は29が7.6cm、30が10.6cmを測る。調整は内底部ナデ、体部内外は風化のため不明であるが、底部の切り離しはいずれも糸切りである。色調は淡黄茶色を呈し、焼成も良好である。

石器（第11図） 右基端を大きく欠損している石鎌である。基部に大きくV字状に抉りの入る調整加工から、縄文時代早期に見られる鎌形鎌であろう。残存計測値は、長さ1.9cm、厚さ0.3cm、重さ0.6gで、石質は黒曜石製である。

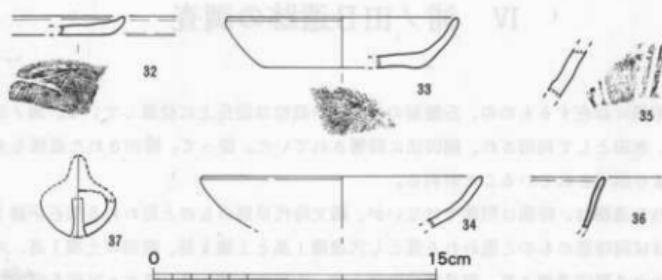
3. 表採資料（図版9、第12図）

土師器（32~35）

32は小皿の小破片で、底部の切り離しは糸切りである。色調は橙褐色を呈し、焼成も良い。

33・34は杯の破片資料で、復原口径は33が12.4cm、34が14.8cmを測る。調整は体部内外ヨコナデ、底部の切り離しは33が糸切りである。色調は33がいずれも淡黄茶色を呈し、焼成も良好である。

35は摺鉢の脚部破片で、内面には数条の溝が施されている。色調は内面淡茶褐色、外側暗黄



第12図 表採土・土製品実測図(1/3)

茶褐色を呈し、焼成も良好である。

磁器(36) 口禿げの白磁皿の小破片で、釉調は淡青白色、胎土は乳白色を呈している。

土鉢(37) 上半部を欠くが、体部は扁球形を呈し、開孔部はヘラ状のもので「コ」字形に切り取っている。体部内外の調整はナデで仕上げている。体部最大径は4cmを測る。色調は淡黄茶色を呈し、焼成も良好である。



第13図 発掘風景

IV 浦ノ田B遺跡の調査

遺跡は谷部に存在するものの、丘陵裾の一段高い低位な段丘上に位置している。浦ノ田A遺跡と同様、水田として利用され、棚田状に開墾されていた。従って、検出された遺構も全体に浅く、かなり削平されていることが判る。

検出された遺構は、時期は明確ではないが、縄文時代早期のものと思われる集石炉跡3基をはじめ、ほぼ同時期のものと思われる落とし穴遺構1基と土壙2基、晩期の土壙1基、中世のものと思われる竪穴遺構2基、据立柱建物跡5棟、大形の土壙1基、排水と区画を意識した溝状遺構9条が検出された。

他に、遺構は検出されなかったもののナイフ形石器などの旧石器時代の石器をはじめ、古墳時代後期の須恵器片なども出土している。

1. 旧石器・縄文時代の遺構と遺物

(1) 旧石器時代の石器（図版21、第15図）

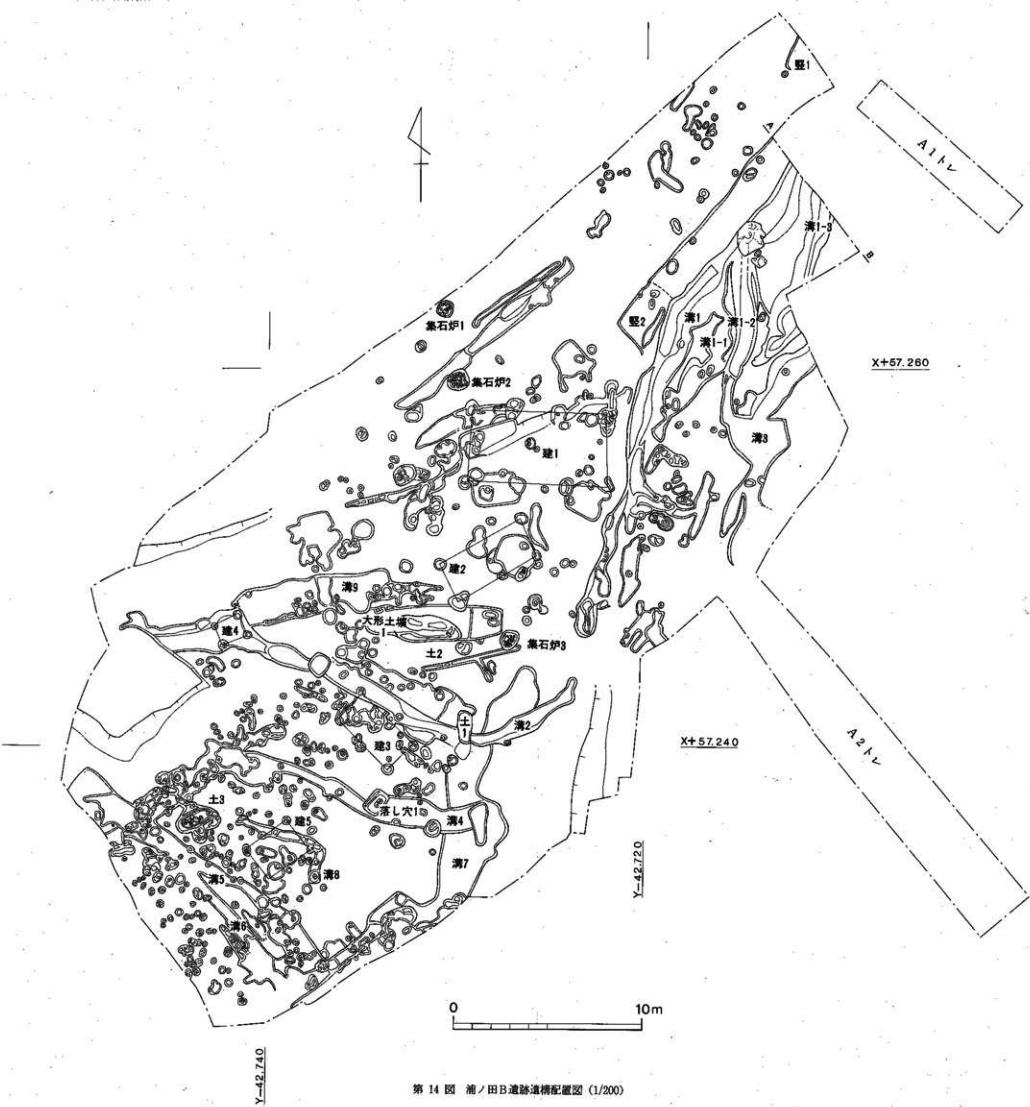
本遺跡では、旧石器時代に属すると思われる石器がプライマリーでない状態で出土した。ここでは可能性のあるものも含めて説明する。

ナイフ形石器（1・2） 1は縦長剥片を素材とする黒曜石製のナイフ形石器で先端部を大きく欠損する。左側縁の刃済し加工は打点部を除去する形で行われており、一部背面の稜上からも調整が行われている。右側縁に刃済し加工が行われているかは確認できない。ただ、この基部右側は、側縁から中央の稜にかけて剥離面が消えるほどに磨かれている。磨かれた際の線状痕も確認される。バティナの状態から石器製作時期と磨かれた時期に大きな時間差はないと考えられるが、断定はされない。溝1出土。2は横長剥片を素材とする黒曜石製のナイフ形石器で、刃部を一部欠損する。背面の剥離方向は腹面と反対であり、打面は一ヶ所に固定されていない。整形加工は、腹面と背面とから行われており、背面側からの加工は平坦剥離に近い。

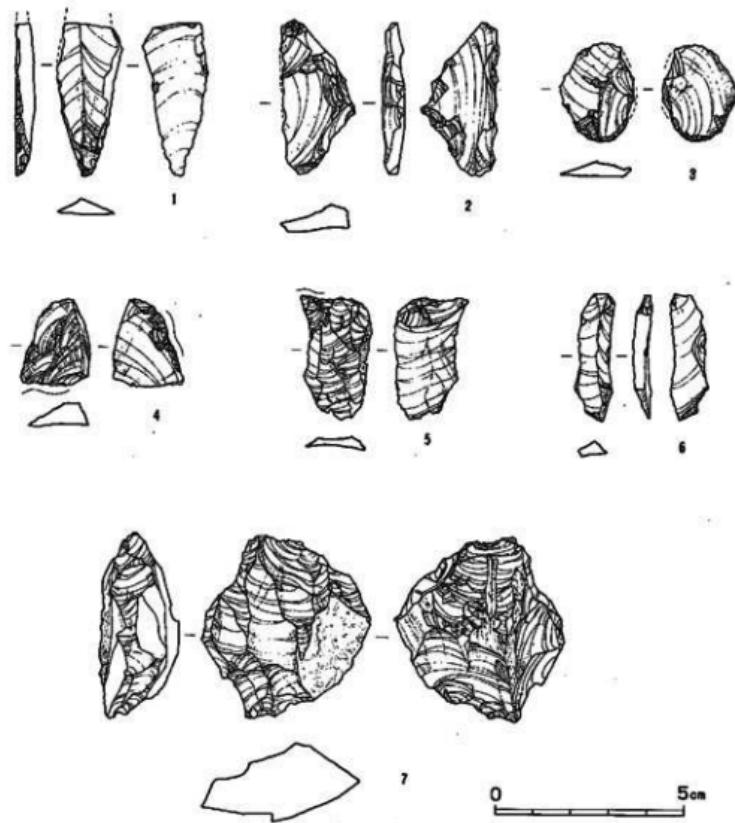
表1 旧石器時代の石器観察表

単位 cm, g

NO	器種	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	出土地点	備考
1	ナイフ形石器	黒曜石	(4.00)	1.70	0.50	2.80	溝1-2	基部研磨
2	ナイフ形石器	黒曜石	4.00	0.70	0.75	4.30	表採	
3	スクレイバー	黒曜石	2.26	(1.95)	(0.45)	2.10	包含層	母指状
4	微細剥離を有する剥片	黒曜石	2.35	1.85	0.75	2.60	大形土壙1	
5	微細剥離を有する剥片	黒曜石	3.20	1.90	0.70	2.70	1号落トシ穴	
6	微細剥離を有する剥片	黒曜石	3.30	1.80	0.55	1.30		
7	石核	黒曜石	4.90	4.40	2.10	36.30	包含層	彫器転用？



第14図 油ノ田B遺跡遺構配図 (1/200)



第 15 図 旧石器時代の石器実測図 (2/3)

表探資料。

スクレイバー (3) 不定形剥片の一部に刃部加工が施された母指状を呈するエンド・スクレイバーである。刃は交互に剥離し作出されている。黒曜石製で包含層出土。

微細剥離を有する剥片 (4~6) 出土石器の中には、微細な連続剥離を有する剥片がある。これらは使用痕か否か断定しえないため、この用語で統一した。4 は剥片の半周程度に微細剥離を有しており、末端付近では、広い範囲に連続している。5 は背面の同一方向の剥離面をも

つ剥片で先端の一部に微細剥離が観察される。6は小形の縦長剥片で打点部付近に僅かに剥離が観察される。

石核(7) 黒曜石製の石核である。表裏両面に原礫面を残しており、剥離は楔形石器に観察される剥離面と同じように両極に集中する。側辺にも剥片剥離面が観察されることから、石核であることは間違いないであろう。図の先端の一部にファシットがあり、彫器としても機能したのであろう。

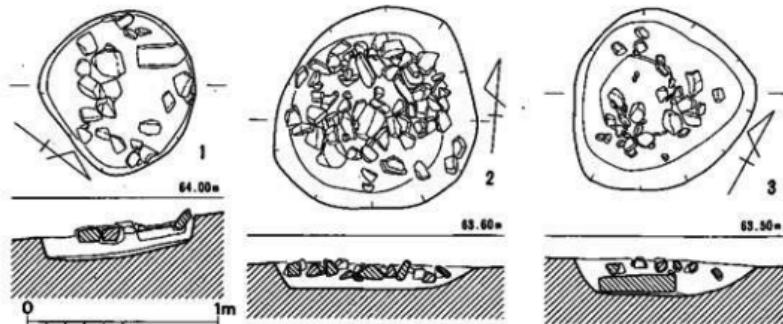
以上、簡単に述べてきたが、資料中最も注目すべきことは、基部の一部が磨かれたナイフ形石器の存在であろう。もし、製作・使用時期と磨かれた時期とに大きな時間差がなければ、今後、装着、使用方法について考えていくことができるだろう。

ところで、福岡県下において、このような事例は隣接する筑紫野市においても確認されている。筑紫野市教育委員会の奥村俊久氏によれば、大字二日市峯畠遺跡において弥生時代の住居跡内から数ヶ所に研磨の痕跡があるナイフ形石器が出土しており、バティナの状況から時間差は考えられないという。報告を待って再検討したい。今後、筑紫野市一帯では、同様の資料の検出が大いに期待される。

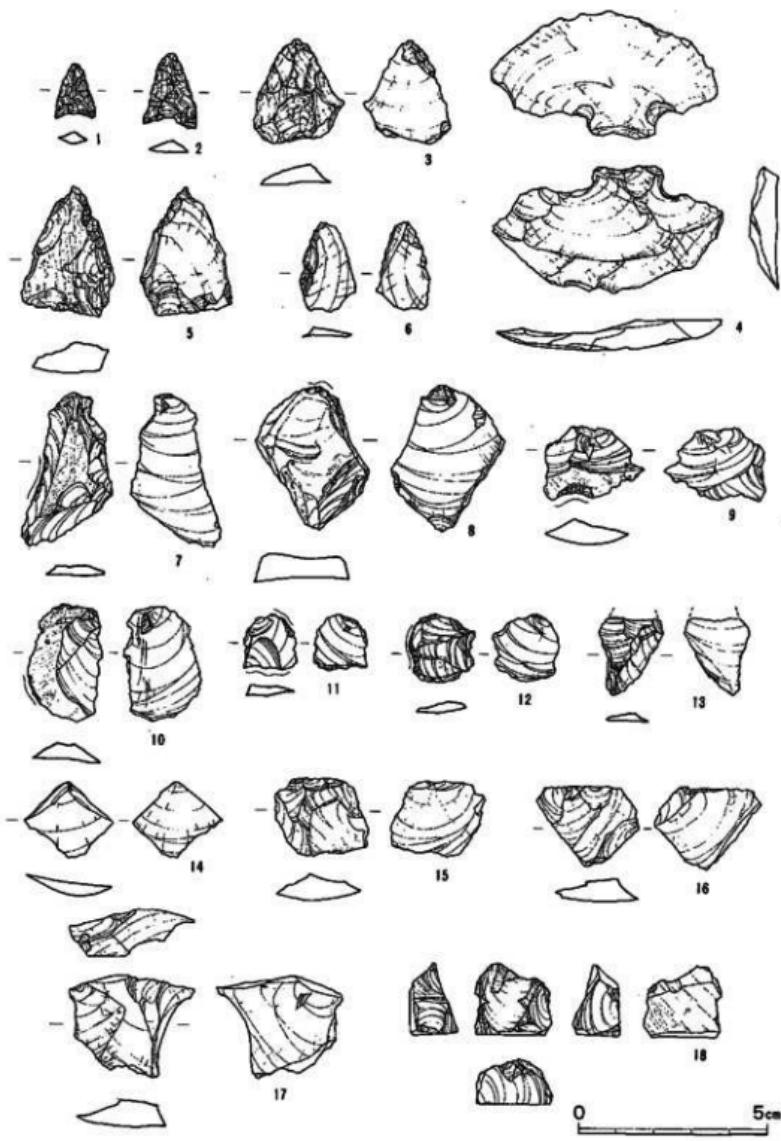
本報告にあたり筑紫野市教育委員会奥村俊久氏には、未発表遺跡の資料の公開を快諾された。記して謝意を表します。

(2) 集石炉跡

1号集石炉跡（図版13、第16図） 発掘区中央西端の丘陵裾部から検出された不整円形プランの炉跡で、炉内には焼かれた大小の角礫が底面より若干浮いた状態で集積されていた。埋土には炭化したと思われる黒色土が堆積していたが、遺物としては黒曜石・サヌカイトの剥片が数点出土しただけである。規模は長径87cm、短径82cm、深さ13cmを測る。



第16図 集石炉跡実測図(1/30)



第 17 図 石器実測図 (2/3)

出土遺物（図版22、第17図）

石器（14・16） 14はサヌカイト製の剥片で、背面には多方向の剥離面がある。16は剥片石核で、大形調整剥片の可能性も含むものとして提示した。一ヶ所に打面を持っている。

2号集石炉跡（図版14、第16図） 1号集石炉の南側から検出された不整円形プランの炉跡で、炉内には1号炉跡より多数の焼かれた大小の角礫が底面より若干浮いた状態で集積されていた。埋土には他の炉跡と同様炭化した黒色土が堆積していたが、遺物は何等出土しなかった。規模は長径110cm、短径106cm、深さ13cmを測る。

3号集石炉跡（図版14、第16図） 発掘区中央南側から検出された不整円形プランの炉跡で、底面には大きな平たい石が据えられ、数は少ないが焼かれた角礫が若干浮いた状態で集積されていた。埋土は他の炉跡と同様、炭化した黒色土が堆積していたものの遺物は何等出土しなかった。規模は長径96cm、短径90cm、深さ19cmを測る。

（3）落とし穴遺構（図版15、第18図）

発掘区西南部から検出された隅丸長方形プランの土壤で、北壁には狭いテラスを設けており、底面には長辺に沿って深さ45cm前後のピットが2個並列して掘られていた。埋土には少量の炭化物を含む黄褐色土が堆積していたが、遺物としては時期は確定できないが土器小片と黒曜石の剥片が数点出土しただけである。規模は長辺140cm、短辺93cm、深さ65cmを測る。

出土遺物（図版22、第17図）

石器（18） 多方面に作業面を持つ黒曜石製の石核である。ある程度小形でまとまった剥片が得られたものと考えられる。

（4）土 壤

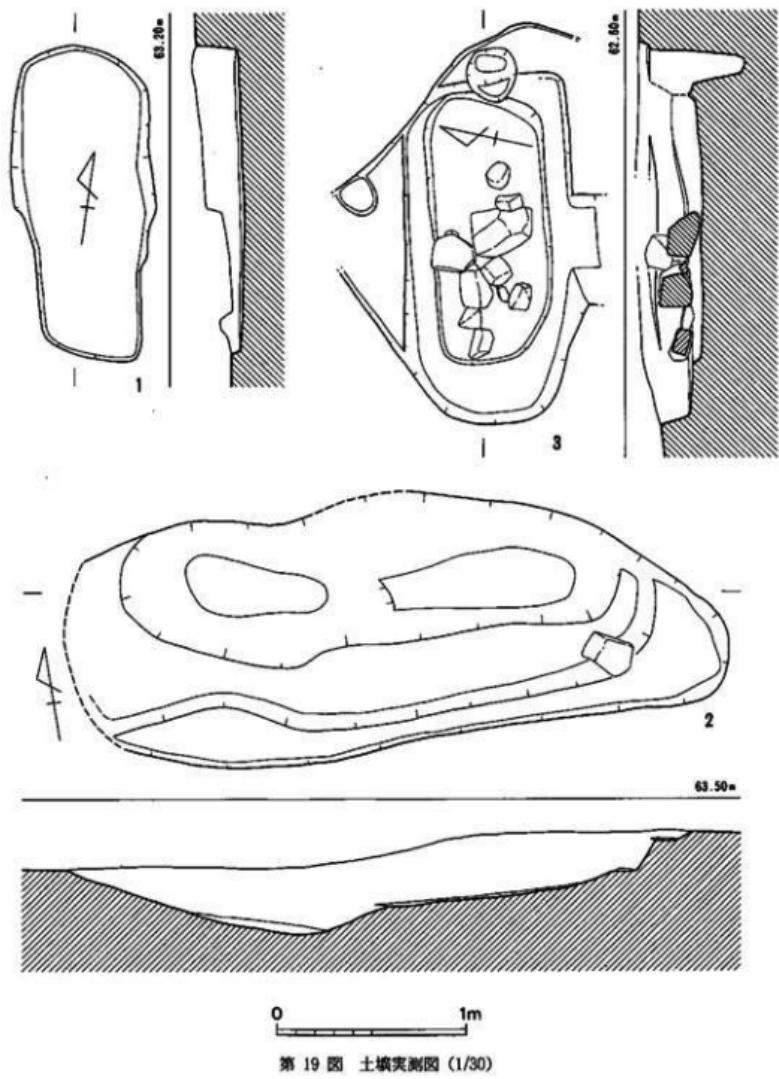
1号土壤（図版15、第19図） 落とし穴遺構の北東側から2号溝状遺構に切られた状態で検出された不整長方形プランの土壤で、埋土からは縄文晩期の土器破片1点と石鎌1、石匙1点が出土しただけである。規模は長辺165cm、短辺75cm、深さ24cmを測る。

出土遺物（図版22、第17・20図）

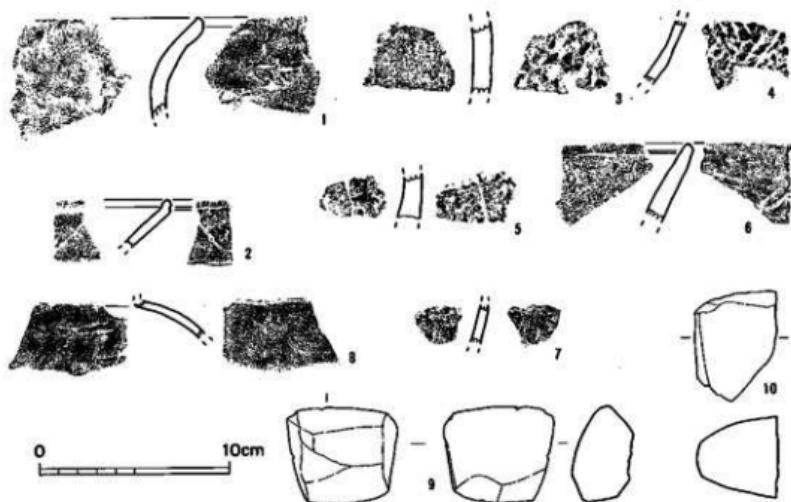
縄文土器（1） 粗製の深鉢形土器の口縁部の破片資料で、外面には楕円押型文の原体の先



第18図 落し穴遺構実測図(1/30)



第 19 図 土壤実測図 (1/30)



第20図 繩文土器・石器実測図(1/3)

端部が触れた痕跡を残している。内面には斜目の沈線状の条痕が走っている。繩文早期の押型文土器と思われる。色調は暗茶褐色を呈し、焼成も良好である。

石器(2・4) 2はサヌカイト製の石鎌で、基部の抉りは浅く左右の基端は揃っていない。4はサヌカイト製の横長剥片を素材としている石匙である。背・腹両面に素材面を残しており、軸はややすれるが、同一方向からの連続剥離により素材剥片が剥離されたことがわかる。つまり部の抉り以外に明瞭な二次加工は認められないが、刃部には使用痕と考えられる剥離がある。

2号土塙(図版16、第19図) 1号土塙の北側から検出された不整楕円形プランの土塙で、南壁と東壁側にテラスを設けている。埋土には落とし穴造構と同様の少量の炭化物を含む黄褐色土が堆積していたが、遺物としては黒曜石の石錐1点と剥片が少量出土しただけである。規模は長辺350cm、短辺132cm、深さ35cmを測る。

出土遺物(図版22、第17図)

石器(3・11~13) 3はサヌカイト製の剥片を素材としている石錐である。背面は全面に加工を施しているが、腹面は先端部のみの加工である。先端部の調整は入念で、錐部作出の意図が伺える。錐部を僅かに欠損している。11~13はいずれも黒曜石製の小形剥片に微細剥離を有する剥片である。

3号土塙(図版16、第19図) 発掘区西南端部から検出された隅丸長方形プランの二段掘り

の土壤で、境内には底面より僅かに浮いた状態で11個の角礫がほぼ中央に集積されていた。埋土には炭化物をかなり含む暗茶褐色土が堆積していたが、遺物としては縄文時代晩期の土器小片が1点出土しただけである。規模は長辺181cm、短辺88cm、深さ33cmを測る。

出土遺物（図版22、第20図）

縄文土器 (2) 縄文晩期の精製浅鉢形土器の口縁部の小破片で、端部はつまみ上げ気味に仕上げ、端部外面には1条の沈線が巡っている。内外ともナデ調整で仕上げており、色調は淡茶褐色を呈し、焼成も良好である。

(5) 縄文時代の遺物（図版22、第17・20図）

縄文土器（第20図3～8）3・4は縄文時代早期の楕円押型土器で、粒も長辺11mm、短辺5mm前後の大粒の押型文である。

5は胸部小破片で、外面条痕、内面ナデ調整している。6も縄文晩期深鉢形土器の口縁部の小破片で、調整は内外とも条痕調整のあとナデで仕上げている半精製の土器である。7は粗製土器の胸部小破片で、内外とも条痕調整している。8は縄文晩期の精製深鉢形土器の胸部破片で、内外ともナデ調整で仕上げている。色調は黒褐色を呈し、焼成も良好である。

石 巻（第20図9・10、第17図1・5～10・15・17・18）第20図9は砂岩製の砥石で、全面研砥している。10は硬質砂岩製の磨石の破片で、側面と上下を利用していている。第17図の1は黒曜石製の石鎌で、先端部を僅かに欠損し、基部の抉りが浅い。第17図5・6は二次加工のある剥片で、5はサヌカイト製の原礫面を残す横長剥片を素材としている。二次加工は素材のほぼ全周に及ぶが規則性に欠けている。尖頭部作出の意図のみ伺うことができ、かつ、使用痕らしき剥離も認められないことから石鎌の未製品と考えられる。6は剥片の二次加工が認められるが、石鎌製作には素材があまりに薄い。7～10は微細剥離を有する剥片である。7は黒曜石製の縦長剥片であるが、背面の剥離方向は多方向である。左側縁に微細剥離が認められる。8は扁平に剥離した剥片で、打点部に微細剥離が認められる。剥離方向がほぼ一定なことから、彫器として機能した可能性が高い。9・10は原礫面に微細剥離を有する剥片である。15はサヌカイト製の背面に多方向の剥離面がある剥片である。17は一ヶ所に打面を持つ剥片石核で、大形調整剥片の可能性をもっている。

表2 縄文時代の石器観察表

単位 cm, g

NO	器種	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	出土地点	備考
1	石鎌	黒曜石	(1.45)	0.60	0.30	0.50	溝7	先端欠
2	石鎌	サヌカイト	1.95	1.40	0.40	0.80	土壤1	
3	石錐	サヌカイト	(2.75)	2.35	0.65	3.50	土壤2	先端欠
4	石匙	サヌカイト	3.35	5.80	0.80	11.80	土壤1	
5	二次加工ある剥片	サヌカイト	3.40	2.45	0.90	6.70	溝2西半部	石鎌未製品？

6	二次加工ある剥片	サヌカイト	2.30	1.50	3.00	0.80	P-15	
7	微細剥離を有する剥片	黒曜石	4.00	2.35	0.60	3.00	表土	
8	微細剥離を有する剥片	黒曜石	3.80	3.00	1.00	9.10	溝2東半部	
9	微細剥離を有する剥片	黒曜石	1.90	2.65	0.75	2.50	溝1第5層	
10	微細剥離を有する剥片	黒曜石	3.05	2.00	0.75	2.90	溝4	
11	微細剥離を有する剥片	黒曜石	1.45	1.40	0.35	0.60	土壤2	
12	微細剥離を有する剥片	黒曜石	1.80	1.60	0.45	0.90	土壤2	
13	微細剥離を有する剥片	黒曜石	(2.05)	1.75	0.25	0.70	土壤2	
14	剥片	サヌカイト	2.00	2.35	0.65	1.50	集石炉1	
15	剥片	サヌカイト	2.00	2.50	0.75	3.40	P-85	
16	石核	サヌカイト	2.10	2.70	0.95	3.70	集石炉1	
17	石核	サヌカイト	2.70	3.30	1.70	8.30	溝3埋土下層	
18	石核	黒曜石	1.80	2.05	1.50	4.10	1号落とし穴	

2. 古墳・歴史時代の遺構と遺物

(1) 穫穴遺構

1号竪穴（図版19、第21図） 発掘区北端から検出された竪穴で、北側は未掘のため不明であり、削平のため西壁側を残すのみである。底面からはビットなどは検出されていない。埋土には少量の炭化物が含まれていたものの、遺物としては土師器小片が出土しただけである。時期は中世のものと思われる。規模は確認している部分では東西0.35m、南北1.9m、深さ西壁側で12cmを測る。

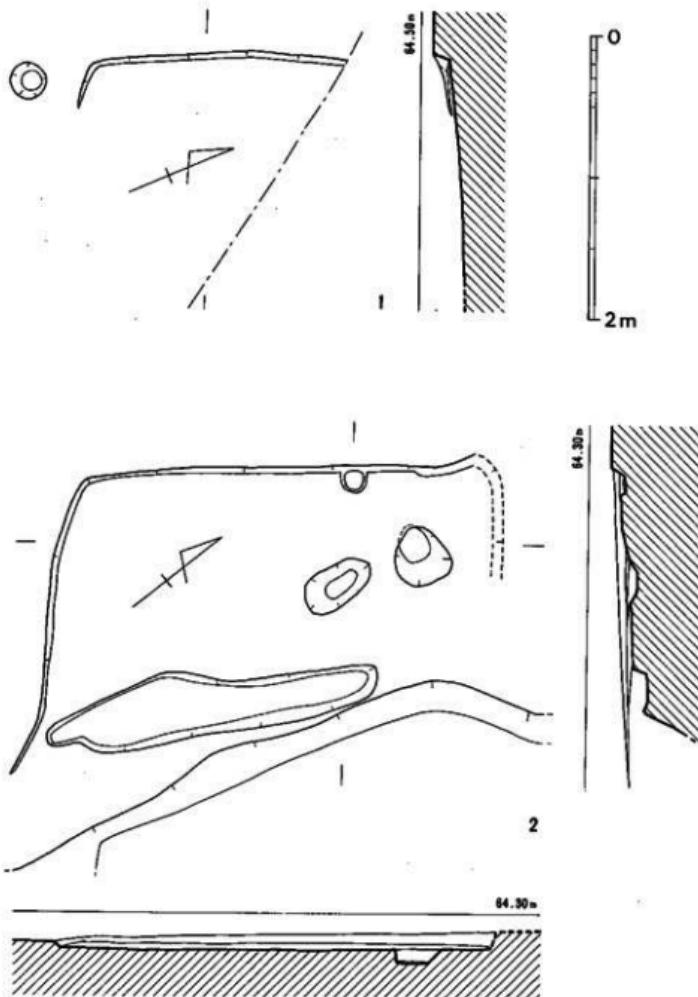
2号竪穴（図版20、第21図） 2号集石炉跡の東側から検出された方形プランの竪穴で、南東側は1号溝に切られ、西壁と南壁の一部を残すだけである。底面には3個のビットがあるが、柱穴としてのまとまりは見られない。埋土には1号竪穴と同様に少量の炭化物が含まれていたが、遺物は若干の土師器小片が出土しただけで、時期は明確ではないが中世のものと思われる。規模は現存部で東西2.1m、南北3.15m、深さ5cmを測る。

(2) 挖立柱建物跡

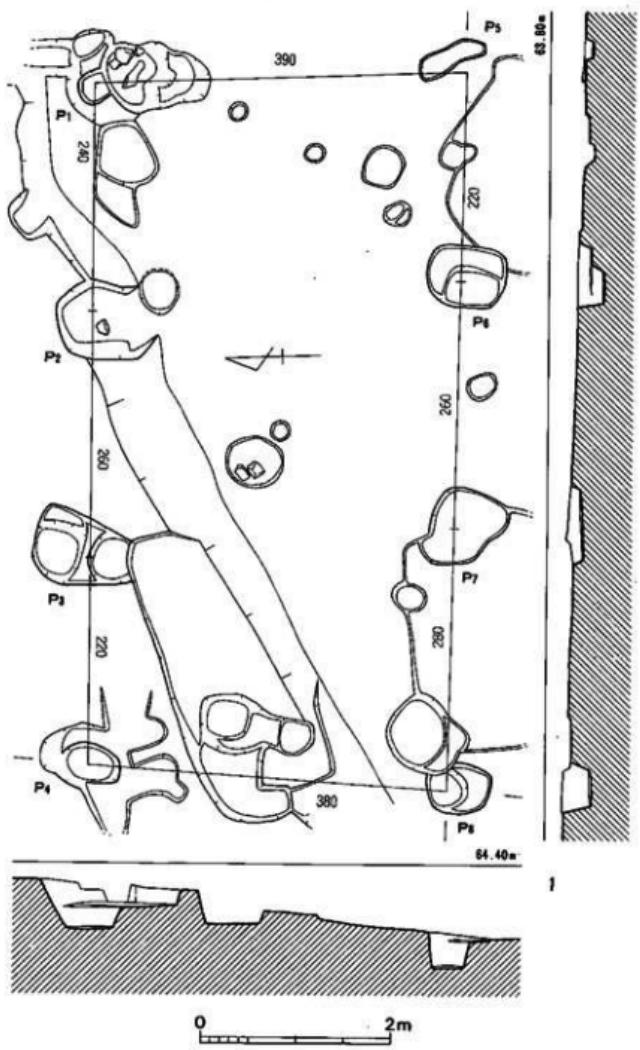
1号挖立柱建物跡（図版17、第22図） 2号集石炉跡の南東側から検出された1間×3間の建物跡である。梁間間平均380cm、桁行間平均246cmを測る。柱穴には二段掘りと素掘りのものがある。主軸はほぼ東西である。また、柱穴内からは土師器・青磁小片が若干出土しており、時期は中世のものと思われる。

出土遺物（第30図）

黒色土器（38） 梶の口縁部の小破片で、口縁下にヨコナデによる稜を残している。



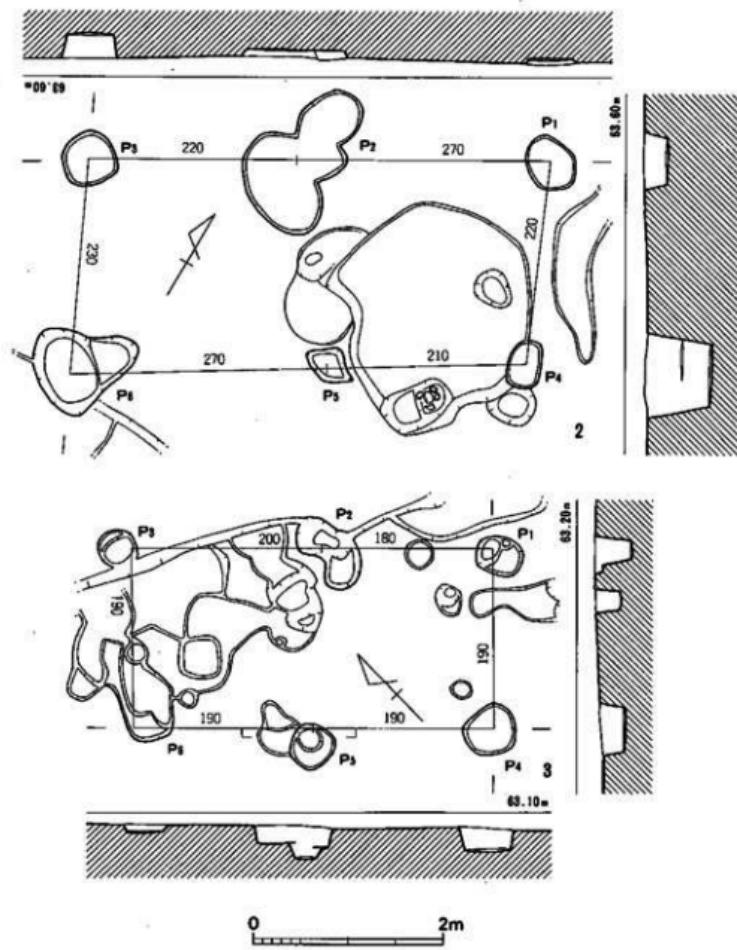
第 21 図 窠穴遺構実測図 (1/40)



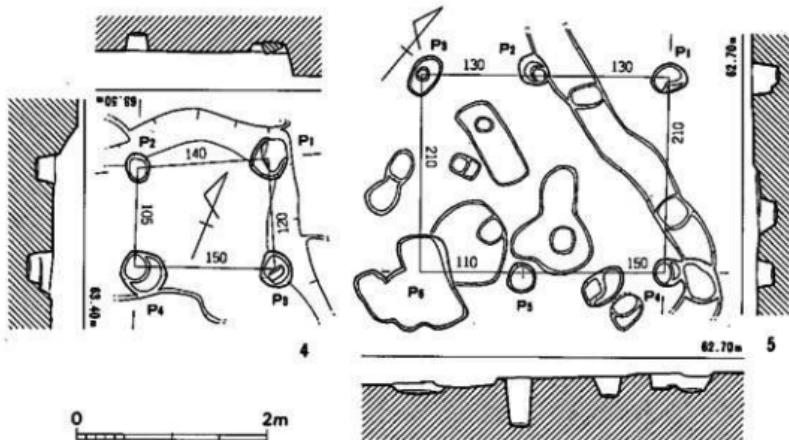
第 22 図 1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

磁器 (41) 玉縁口縁の白磁碗の資料である。釉調は黄白色、胎土は乳白色を呈している。

2号掘立柱建物跡 (図版17、第23図) 1号建物跡の南側から検出された1間×2間の建物跡である柱穴は二段掘りと素掘りのものがある。梁間間平均230cm、桁行間平均242cmを測る。



第23図 2・3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第24図 4・5号掘立柱建物跡実測図(1/60)

桁行方位はN-58°-Eを指す。

3号掘立柱建物跡(図版18、第23図) 2号建物跡の南側から検出された1間×2間の建物跡である。梁間平均190cm、桁行間平均190cmを測る。柱穴は二段掘りと素掘りのものがある。柱穴内からは土師器小片が数点出土しただけである。溝2と一部重複しており、切り合い関係から建物跡の方が古いことが判る。時期は中世であろう。主軸方位はN-46°-Wを指す。

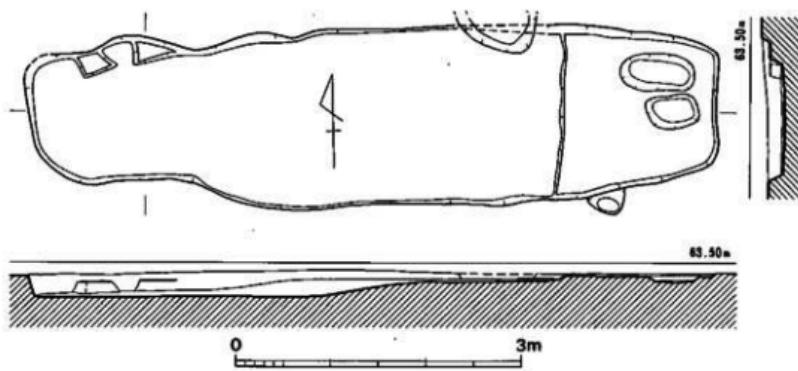
4号掘立柱建物跡(図版18、第24図) 3号建物跡の西側から検出された1間×1間の建物跡である。梁間平均113cm、桁行間平均145cmを測る。柱穴は二段掘りと素掘りのものがあり、P1・P3の底面には根石が据えられていた。桁行方位はN-64°-Eを指す。

5号掘立柱建物跡(図版19、第24図) 3号建物跡の南西から検出された1間×2間の建物跡である。梁間平均210cm、桁行間平均130cmを測る。柱穴は二段掘りと素掘りのものがある。桁行方位はN-50.3°-Eを指す。

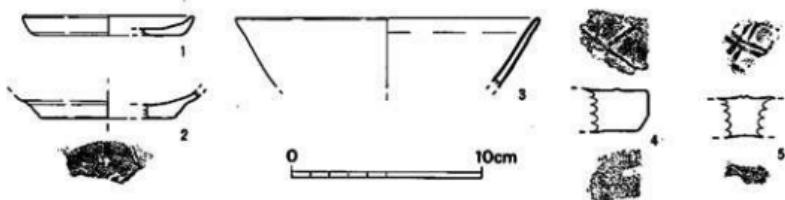
(3) 大形土壙(図版20、第25図)

2号掘立柱建物跡と溝10に一部切られた状態で検出された大形の隅丸長方形プランの土壙で、東壁側にテラスを設けている。埋土には少量の炭化物が含まれており、遺物としては土師器・磁器・瓦片が少量出土している。規模は長辺7.3m、短辺1.8m、深さ27cmを測る。時期は13世紀ころのものと思われる。また、下層からは縄文時代早期のものと思われる土壙が検出されている。

出土遺物(図版23、第26図)



第25図 大形土壙実測図 (1/60)



第26図 大形土壙出土土器実測図 (1/3)

土師器（1・2） 1は小皿で、調整は底部の切り離し手法は風化のため不明である。復原口径は9cm、底径7.8cm、器高は1.05cmを測る。2は杯の底部付近の破片資料で、調整は体部外ヨコナデ、内底部はナデ、底部には廉状圧痕が残されている。復原底径は7.2cmを測る。

磁器（3） 青磁の碗の破片資料で、復原口径は小破片のため不安は残るが16cmを測る。釉調は緑灰色を呈し、胎土は灰色である。

瓦（4・5） いずれも小片であるが、平瓦の破片と思われる。外面のタタキ目は4が大きめの斜格子、5は複線の斜格子目文で、内面はいずれも布目圧痕が残されている。

(4) 溝状造構

1号溝（図版11・21、第4図） 段丘裾の地形変換部に沿って形成された南北に走る溝である。また、北端部付近では3本の支流（溝1-1、溝1-2、溝1-3）が形成されてるが、溝1-3は1号溝が廃絶したあとに造られた溝で、最も新しい溝である。溝1-1と溝1-2は1号溝と同時に存在したものかは不明である。1号溝が形成されている地形変換部は、水田開墾時の開削部と重なり溝の東壁の大半が消失している。溝底は北から南に傾斜している。埋土か

らは土師器・須恵器・瓦器・磁器・瓦などの小破片が多数出土した。土器には6世紀後半から末に比定される古い時期のものもあるが、形成時期は14世紀と思われる。規模は全長27.5m、幅は0.5~1.8m、深さ35~53cmを測る。

出土遺物（図版23、第28図）

須恵器（6） 杯蓋の体部破片資料で、調整は天井部外面回転ヘラ削り、内面ナデ、体部内外はロクロヨコナデで仕上げている。色調は灰色を呈し、焼成も良好である。

土師器（7~11） 7は小皿、8・9は杯の破片資料である。調整は体部内外ヨコナデ、内底部ナデ、底部の切り離しはいずれも糸切りである。復原口径は7が7.8cm、8が14.5cm、底径は7が6cm、8が10cm、9が8cm、器高は7が7.8cm、8が2.4cmを測る。

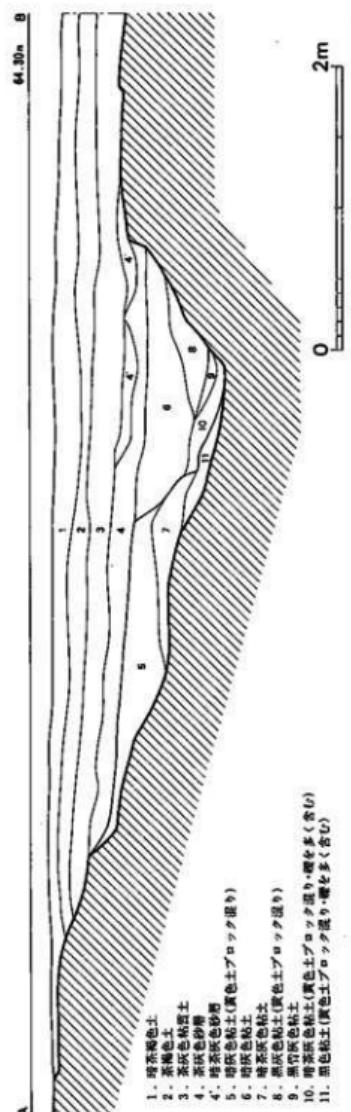
10は土師質の湯釜の肩部の破片で、外面には四菱文のスタンプが施され、上下を沈線が巡っている。色調は茶黄色を呈し、焼成も良好である。

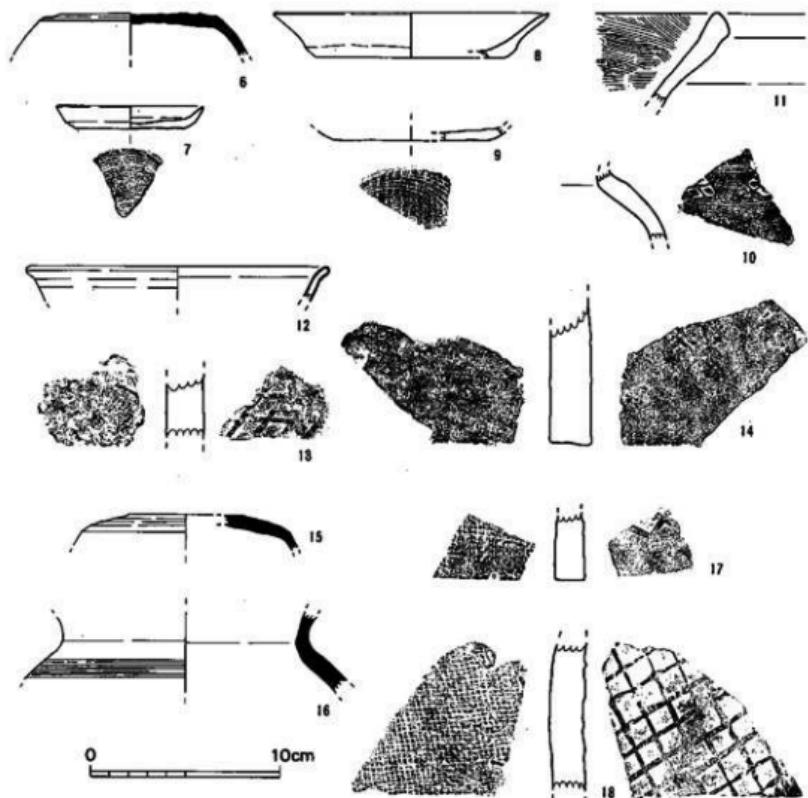
瓦器（11） 土鍋の口縁部の破片資料で、外面ナデ、内面刷毛調整で仕上げている。

磁器（12） 青磁の椀の破片資料で、復原口径16cmを測る。釉調は緑灰色、胎土は淡灰色を呈している。

瓦（12・13） いずれも平瓦の破片で、外面のタタキ目は12が斜格子、13が複線の斜格子文のあとナデで、内面は両者とも布目圧痕を残している。13は小口部を残しており、ヘラ削りで仕上げている。

溝1-1（図版11、第4図） 1号溝から派生する最も西側の溝で、1号溝に沿って走っている。水田の開削で削平されているが全長7.2



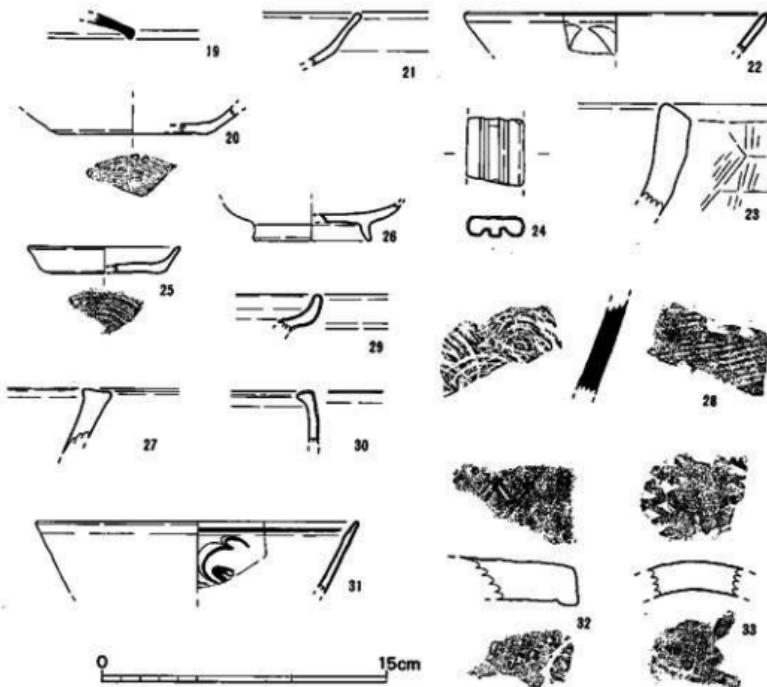


第 28 図 溝出土遺物実測図 1 (1/3)

m、残りの良い所で幅1.5m、深さ20cmを測る。埋土からは若干の土師器小片が出土しただけで、形成時期は不明である。

溝1-2(図版11、第4図) 溝1-1の東側に近接して形成された南北に走る溝で、南端は3号溝と合流している。埋土からは数点の土師器小片が出土しただけである。全長8.6m、幅1.3m、深さ25cmを測る。

溝1-3(図版21、第4図) 溝1-2の東側を南北に走る全長9.2mの溝で、最も新しい時期の溝である。また、削平されているため明確ではないが本来は溝3に合流していたものかも



第29図 溝出土遺物実測図2 (1/3)

しない。埋土からは土師器・須恵器・瓦などの小片が少量出土した。図示できる土器や瓦は6世紀後半と10世紀代の瓦であるが、溝の時期は土師器小片が示す14世紀代と思われる。

出土遺物(図版23、第28図)

須恵器(15・16) 15は杯蓋の天井部の破片資料で、調整は外面向転ヘラ削り、内面ロクロヨコナデ仕上げである。16は壺の肩部の破片で、調整は頸部外面向ロクロヨコナデ、肩部外面向キ目、内面はナデで仕上げている。いずれも6世紀後半代のものである。

瓦(17・18) いずれも外面向タタキが斜格子文、内面は布目であり、格子目からすれば10世紀代のものとも思われる。

2号溝(図版12、第4図) 発掘区南半部から検出された東西に走る溝で、東端部で緩やかに1号溝の方向に曲がる。本来は1号溝と同一の溝であった可能性が高いだろう。その意味では1・2号建物が建つ段丘面を方形に区画した溝とも考えられる。埋土からは土師器・須恵器

小片がかなり出土したもの、図示できたのは8世紀後半の須恵器だけであるが、溝の時期は土師器小片の示す14世紀代と思われる。確認できた範囲で全長24.5m、幅1.2m、深さ30cmを測る。

出土遺物（図版24、第29図）

須恵器（19） 蓋の破片資料で、口縁端部は断面三角形を呈している。調整は天井部内外ナデ、口縁部内外ロクロヨコナデで仕上げている。

3号溝（図版13、第4図） 溝1の東側を南北に蛇行気味に走る溝で、南端は谷部に流入している。確認した範囲での溝の全長は12.5m、幅1.7m、深さ15cmを測る。埋土からは上層で酸化鉄の薄い堆積層が見られたが、遺物としては少量の土師器片が出土しただけである。時期は土師器の示す14世紀前半と思われる。

出土遺物（図版24、第29図）

土師器（20） 杯の体部下半の破片資料で、復原底径は8cmを測る。調整は体部内外ヨコナデ、内底部ナデ、底部の切り離しは糸切りである。

4号溝（図版12、第4図） 3号溝の南側にあり、ほぼ並走して東西に走る溝で南端部は5号溝に合流している。現存部での規模は全長16m、幅1.5m、深さ5cmを測る。埋土からは土師器・磁器・石鍋などの破片が少量出土したが、新旧の土器が混在している状態であった。しかし、溝の形成時期は青磁の示す13世紀代と思われる。

出土遺物（図版24、第29図）

土師器（21） 体部外面に屈折線を残す丸底の杯と思われ、内外ともナデで仕上げている。10世紀代のものであろう。

磁器（22） 龍泉窯系の青磁の碗で、外面には蓮弁文が施されている。釉調は緑灰色、胎土は淡灰色を呈す。復原口径は16cmを測る。

石鍋（23） 滑石製の石鍋片で、体部外面には削り痕がみられ、煤が付着している。

5号溝（図版13、第4図） 発掘区南端部から検出された東西に走る溝で、ほぼ3号溝に並走していく、途中で6号溝とも合流している。確認範囲で全長14m、幅1.3m、深さ7cmを測る。埋土からは少量の土師器片や陶器片が出土しただけである。

出土遺物（図版24、第29図）

陶器（24） 水注の把手で、外面に2条の凹線が施されている。釉調は黄茶褐色、胎土は暗灰色を呈している。幅は3cm、厚さは1cmを測る。

6号溝（図版13、第4図） 発掘区南端部から検出された溝で、5号溝の途中から分岐した溝である。東端部は浅くなり消失している。確認部分で全長7.3m、幅0.7m、深さ6cmを測る。埋土からは土師器・須恵器・磁器・瓦などの破片が少量出土しているが、新旧の土器が混在している状態であるが、溝の時期は多くの土器が示す14世紀初めと思われる。

出土遺物（図版24、第29図）

土師器（25～27） 25は小皿で、調整は体部内外ヨコナデ、内底部ナデ、底部の切り離しは糸切りである。復原口径は8cm、底径5.8cm、器高は1.4cmを測る。色調は白橙色を呈し、焼成も良好である。

26は高台付の椀の底部付近の破片資料で、体部内外ナデ、高台はヨコナデで仕上げている。復原高台径は6.2cmを測る。10世紀代のものと思われる。

27は摺鉢の口縁部の小破片で、体部内外ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。

須恵器（28） 壺の胴部破片で、外面平行タタキ、内面青海波文のタタキで調整している。色調は青灰色を呈し、焼成も良好である。

磁器（29・30） 29は小破片のため明確ではないが青磁の大盤の口縁部付近の破片資料であると思われる。釉調は淡緑青色、胎土は淡灰色を呈している。珍しい資料である。

30は香爐の口縁部付近の小破片で、口縁端部を内面につまみ出して仕上げている。釉調は緑灰色で、内面は露胎のままである。

7号溝（図版10、第4図） 2号溝と4号溝に切られた状態で検出された南北に走る溝である。南端部は現代の溝で壊されている。埋土からは少量の土師器・磁器・瓦などの小破片が出土地しただけである。時期は13世紀代と思われる。現存部での規模は全長13.3m、幅2m、深さ6cmを測る。

出土遺物（図版24、第29図）

磁器（31） 青磁碗の破片資料で、体部内面には1条の圓線と草花文が描かれている。釉調は黄緑灰色、胎土は暗灰色を呈している。復原口径は17cmを測る。

瓦（32・33） 32は平瓦、33は丸瓦で、外面のタタキは32が複線斜格子、33は斜格子文、内面はいずれも布目である。色調は32が黄茶色、33は灰色を呈し、焼成は32が軟質、33は硬質である。

8号溝（図版10、第4図） 1号溝の東側から検出された直行する溝で、全長12m、幅1.1m、深さ7cmを測る。埋土からは土師器小片が1点出土しただけで、時期などは不明である。

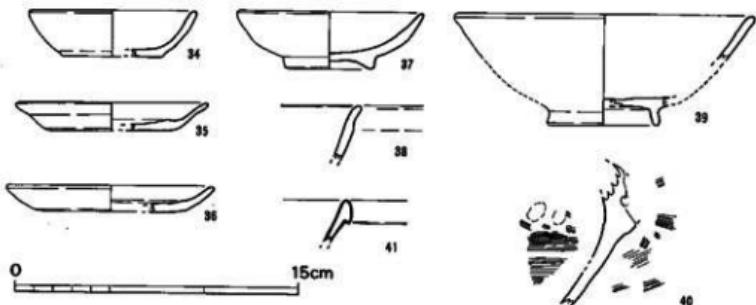
9号溝（図版10、第4図） 2号溝の北側から検出された幅広の溝で、全長8.4m、幅2.1m、深さ9cmを測る。埋土からは土師器・磁器小片が少量出土した。

(5) ピット及び包含層出土遺物

ピット出土の遺物（図版25、第30図）

土師器（34～39） 34～36は小皿で、34は復原口径9cmと小さいのに対して、35・36は10～11cmと大きい。底部の切り離しは風化のため不明である。34は14世紀前半、35・36は12世紀後半代のものと思われる。

37・38は高台付の椀で、37は超小型の特異な椀である。復原口径は9.8cm、高台径4.8cm、器



第30図 ピット内出土土器実測図(1/3)

高は3.1cmを測る。調整は器面風化のため不明である。34とともにP1内出土。38は復原口径16cm、高台径6cmを測る。口縁部と高台部内外はヨコナデ、体部内面はナデで仕上げている。

瓦質土器(40) 耳部を有す湯釜の胴部破片で、内外とも細かい刷毛調整で仕上げており、耳部内面には指押さえ痕が残っている。外面には著しい煤の付着が見られる。

包含層出土の遺物(図版24・25、第31・32図)

須恵器(42~45) 42・43は杯蓋の破片資料で、42は復原口径19.2cmを測る。調整はいずれもロクロヨコナデである。

44は高台付椀の体部資料で、内外ともロクロヨコナデで仕上げている。復原口径は15.8cmを測る。杯蓋と高台付椀とも8世紀後半のものであろう。

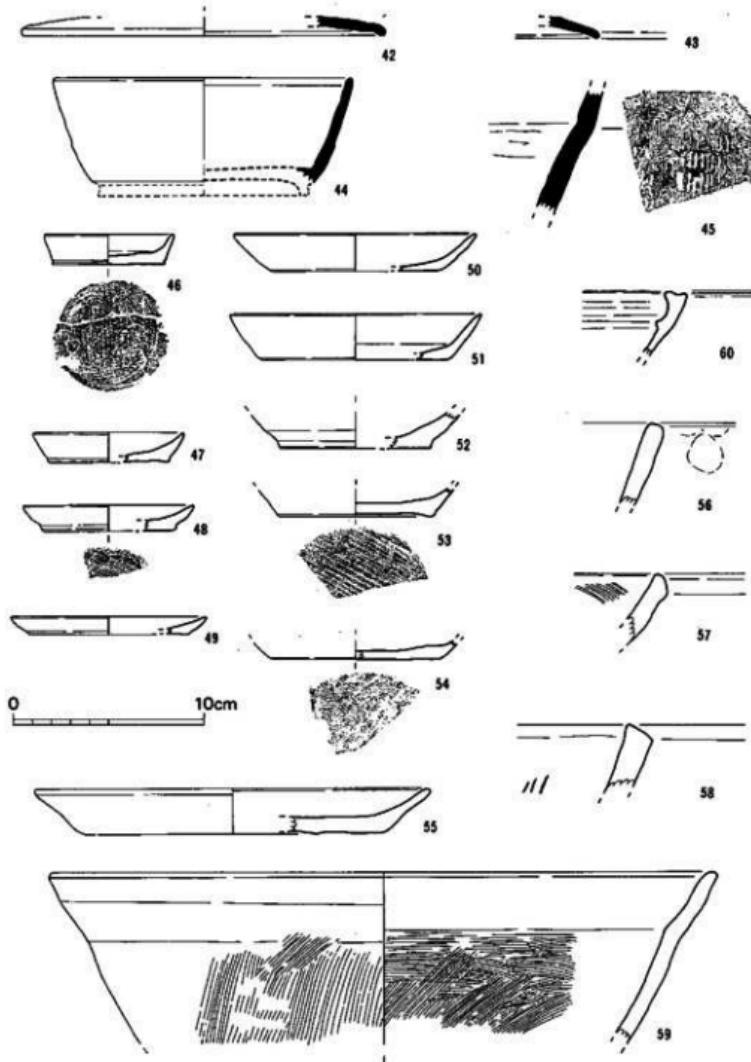
45は臺の胴部破片で、格子目タタキのあとナデ、内面ナデで仕上げている。

土師器(46~59) 46~49は小皿で、大小がある。46は小型で口径6.8cm、47は8cm、48は9cm、49は最も大きく10.3cmを測る。底部の切り離しは47が廉状圧痕のあと糸切りの他は全て糸切りである。口径・底径・器高の比からすれば、46・47は14世紀前半、49は12世紀後半、その中間とも言える48は13世紀代のものであろう。

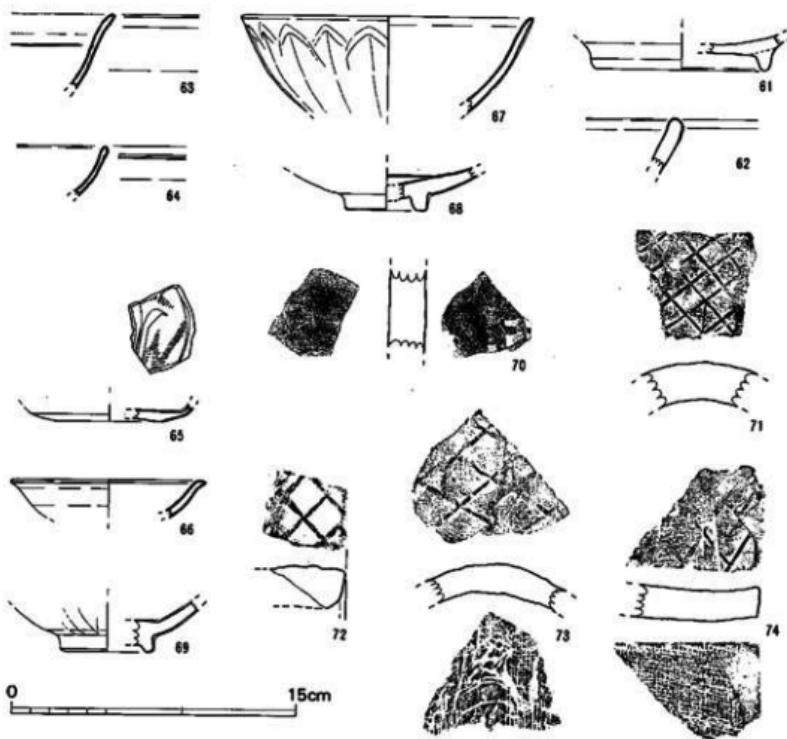
50~55は杯の破片資料で、大小がある。特に、55は超大形の杯で復原口径20.9cm、底径15.7cm、器高2.4cmを測る。調整は体部内外ヨコナデ、内底部はナデ、底部の切り離しは53・55が廉状圧痕、他は全て糸切りである。復原口径は50が12.8cm、51が13.3cm、底径は50が8.8cm、51が9.8cm、器高は50が2cm、51が2.45cmを測る。口径・底径・器高の比からすれば50・51は12世紀後半から13世紀、52は14世紀末から15世紀初頭、55は12世紀後半頃のものであろう。

56・57・59は土鍋の破片資料で、調整は胴部外表面を56・57がナデ、59は刷毛、内面は57・59が刷毛、56はナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。59は復原口径35.2cmを測る。

58は摺鉢の小破片で、調整は風化が著しく不明である。



第31図 包含層出土土器実測図(1/3)



第32図 包含層・表採物実測図 (1/3)

陶器 (60~62) 60は鉢の破片資料で、口縁部内面には2条の凸帯が巡る。内外ともヨコナデ調整している。色調は赤紫色を呈し、焼成も良好である。61・62は灰釉陶器で、61が高台付碗、62は鉢と思われる。口縁端部には淡緑色の釉がかかっている。

磁器 (63~69) 63・64は白磁の碗で、64は小さい玉縁を有し、63の内面には1条の沈線が巡っている。釉調はいずれも淡黄白色、胎土は乳白色を呈している。

65は同安窯系の皿で、内底部には櫛歯波状文が描かれている。釉調は淡緑色を呈し、外底部は無釉である。

66~69は青磁の高台付碗の破片資料で、66は小型の碗で復原口径10.4cmを測る。釉調は黄緑色、胎土は淡灰色を呈す。67~69は龍泉窯系の高台付碗で、67・69の外面には錦運弁文が施され、68の内底部には1条の圓線が巡っている。釉調は67・69が黄緑色、68は淡緑色、胎土は灰

色を呈している。67の内外面は風化のため釉が禿げている。67は復原口径15.4cmを測る。

瓦(70~74) いずれも外面のタタキは斜格子文で、格子目には大小がある。内面には全て布目がある。色調は70・71が灰色、72は暗灰色、73・74は淡灰色を呈し、71が硬質の他はいずれも焼きは軟質である。

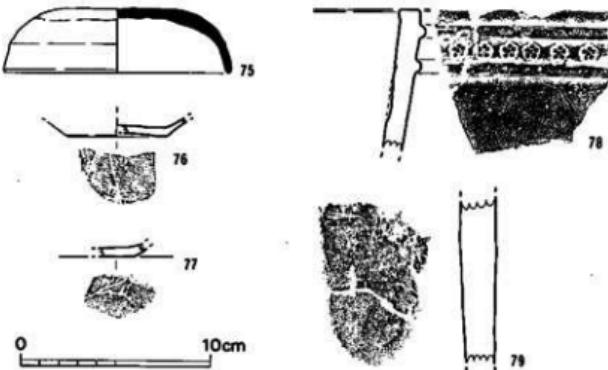
A 1・2 トレンチ出土の遺物 (図版25、第33図)

須恵器(75) 杯蓋の破片資料で、調整は天井部外面手持ちヘラ削り、内面ロクロヨコナデのあとナデ、口縁部内外はロクロヨコナデ仕上げである。色調は暗灰色を呈し、焼成良好である。時期は6世紀末と思われる。

土師器(76・77) いずれも小皿の底部付近の小破片で、底部の切り離しは糸切りである。

瓦質土器(78) 火鉢の体部上半の破片で、口縁下には2条の凸帯が巡り、その間には梅花文の刻印が施されている。

瓦(79) 丸瓦の破片資料で、外面はタタキナデ消しており、内面には布目が残されている。色調は外面灰色、内面黒灰色を呈し、焼成は軟質である。



第33図 A 1・2 トレンチ出土土器実測図 (1/3)

V おわりに

浦ノ田A遺跡は、水田開墾時の削平もあってか、土壌1基と6条の溝状遺構が検出されただけの、極めて希薄な遺跡であった。出土遺物の量が整理箱半分程度と少ないとからすれば、もともと小規模な遺跡であったと思われる。その時期は、一部、12世紀後半の遺物も含むが、その大半が13世紀末から14世紀初めという短期間に形成された遺跡であることを示している。いずれの溝も自然流路を利用・改変したものと思われ、蛇行している。4号溝内から検出された杭列が溝に沿って形成されているので、その機能は護岸的なものかもしれない。また、溝内から出土した松の木の幼果は、4号溝の埋没時期が14世紀末の夏の頃であったことを物語るものであろう。

浦ノ田B遺跡から検出された遺構は、時期の確定はできないが、縄文時代早期のものと思われる集石炉跡3基をはじめ、ほぼ同時期のものと思われる落とし穴遺構1基と土壌2基、晩期の土壌1基、中世のものと思われる竪穴遺構2基、掘立柱建物跡5棟、大形の土壌1基、排水と区画を意識した溝状遺構9条である。この時期の遺構の中心時期は、13世紀後半ないしは末から14世紀初めといえ、浦ノ田A遺跡とも基本的に同時期に形成された遺跡であるといえよう。

また、遺構は検出されていないが、旧石器時代の石器をはじめ、古墳時代後期（6世紀後半から末）、奈良時代（8世紀後半）の土器も出土している。

ここでは、その成果を二・三整理して、まとめとしたい。

その一つは、前項で杉原氏が指摘しているナイフ形石器の基部の一部が研磨されていることである。それが柄の装着や使用方法を物語る痕跡であるとすれば、大変注目されることであり、今後の資料の増加が期待されよう。

二つ目は、小規模ではあるが、縄文時代早期（押型文土器）の集落跡が発見されたことである。集石炉跡・落とし穴・土壌の組合せは、この時期の集落の特徴であり、最近調査された近接する原遺跡でも同様な集落が発見されている。時期的には原遺跡の押型文期の中葉と古いのに対し、本遺跡は少し新しい後葉の時期のものである。いずれも季節的に移動したキャンプ地的な小規模で短期間に形成された遺跡と考えられる。その内容は明らかではないが、原遺跡の南に位置している同じ押型文期の小賀谷遺跡も同様な遺跡の可能性が高く、この時期の縄文人の集団移動を、今後、考えていく上で興味深い遺跡となるだろう。

三つ目は、小規模ではあるが、本遺跡の中心時期である中世の集落の変遷である。全体に削平されているとともに、遺物の量も少なく小破片が多いため時期設定に不安を残すが、13世紀後半から14世紀初め頃にその中心があると考えている。5棟の掘立柱建物と排水と区画を意識したと思われる溝状遺構との関係を検討してみると、少なくとも三時期の変遷を考えられるで

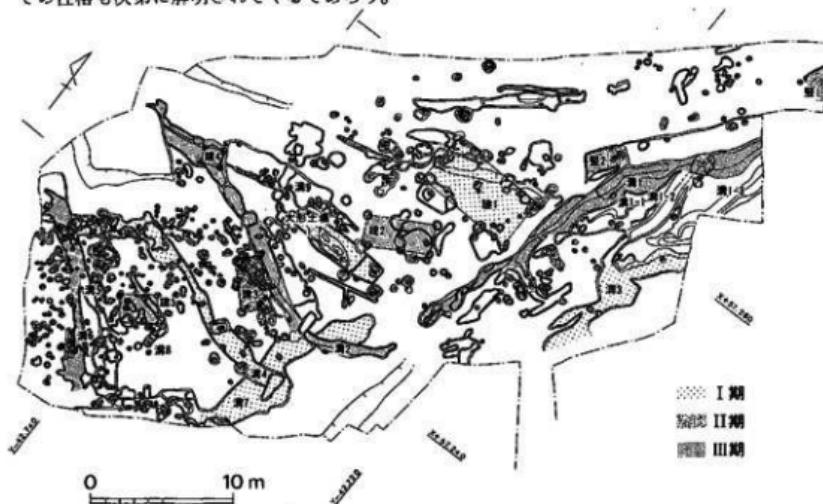
あろう（第34図）。

I期は、13世紀後半の時期で、最も大きい1号掘立柱建物と主軸が同じ大形土壙、それを取り囲む溝としては、3号溝、4号溝、7号溝の3条である。3号溝と7号溝はもともと同一の溝で、4号溝とも繋がり「L」字形に区画していた可能性がある。

最も新しい時期と考えているⅢ期は、2号掘立柱建物と5号掘立柱建物、それを取り囲む1号溝、2号溝、6号溝の3条である。I期と同様、1号溝と2号溝はもともと同じ溝で内部を「L」字形に区画していたものと思われる。区画するかは明らかではないが、5号掘立柱建物の外側にも6号溝が走っている。二重の区画が存在したのかもしれない。時期としては、14世紀初めの頃である。

II期は、3号掘立柱建物と4号掘立柱建物が、2号溝に切られているので、その間の時期としたものである。また、建物の主軸と直交する1・2号堅穴もこの時期に比定しておきたい。しかし、I・Ⅲ期にみられた区画する溝は存在していない。

I期からⅢ期へと変遷した中世期の、それも限られた13世紀後半から14世紀初めという短期間に形成された小規模な集落の性格は、遺跡の立地などから単純に農耕集落とか、特定の機能をもたされた集落とかいえず、その性格は不明といわざるを得ない。まさに、安楽寺（太宰府天満宮）の最盛期である10世紀から13世紀初めを過ぎた時期とは言え、近接する本遺跡が全く無縁であったとは思えない。今後、周辺でこのような小規模な集落の存在が明らかにされれば、その性格も次第に解明されてくるであろう。



第34図 中世集落の変遷図 (1/400)

図 版



国立博物館建設予定地と浦ノ田 A・B 遺跡周辺航空写真



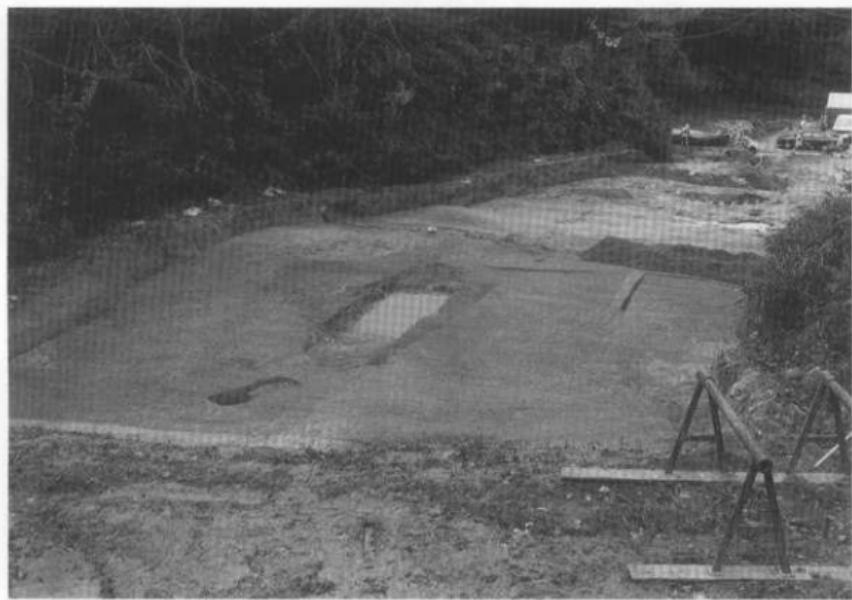
1 浦ノ田A・B遺跡周辺航空写真①（南から）



2 浦ノ田A・B遺跡周辺航空写真②（北から）



1 浦ノ田A遺跡発掘区全景（北から）



2 発掘区南端部全景（南から）



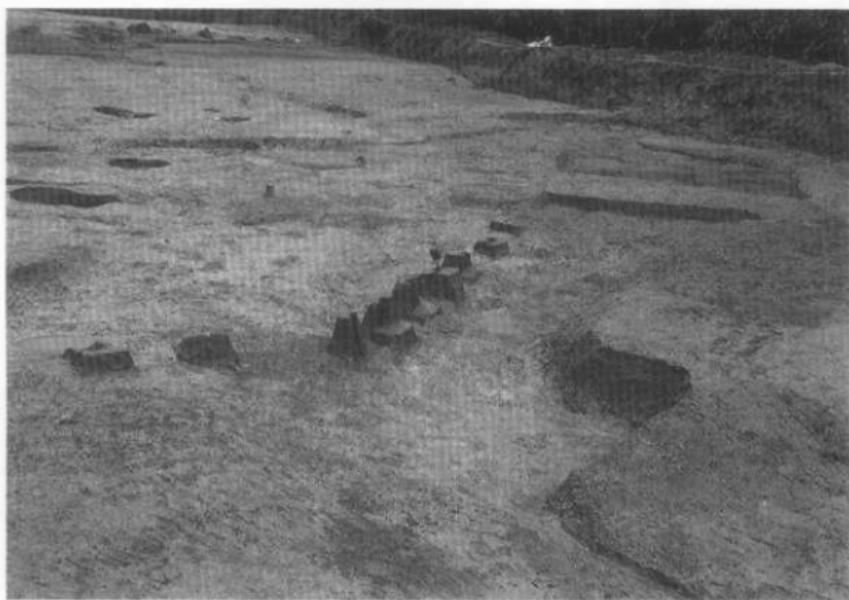
1 土壌（東から）



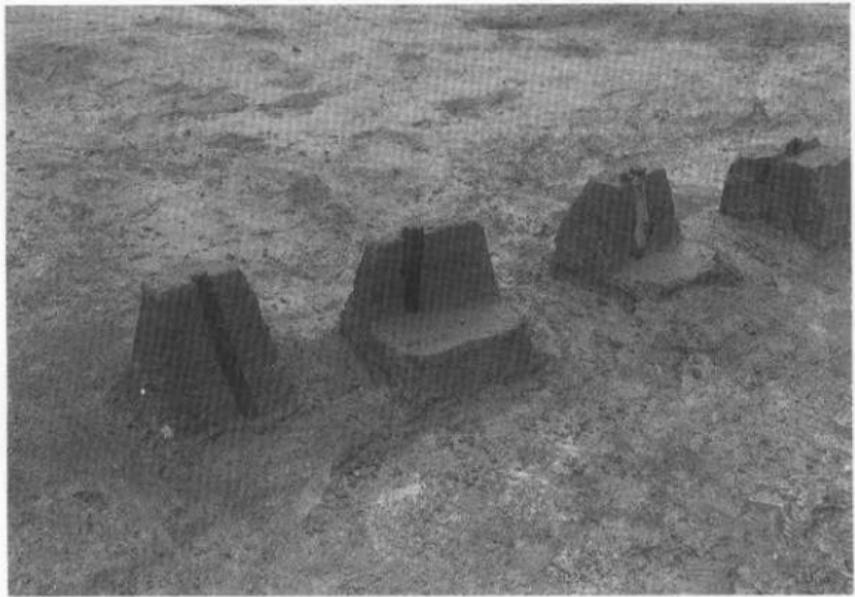
2 発掘区中央部全景（北東から）



1 1～4号溝全景（北東から）



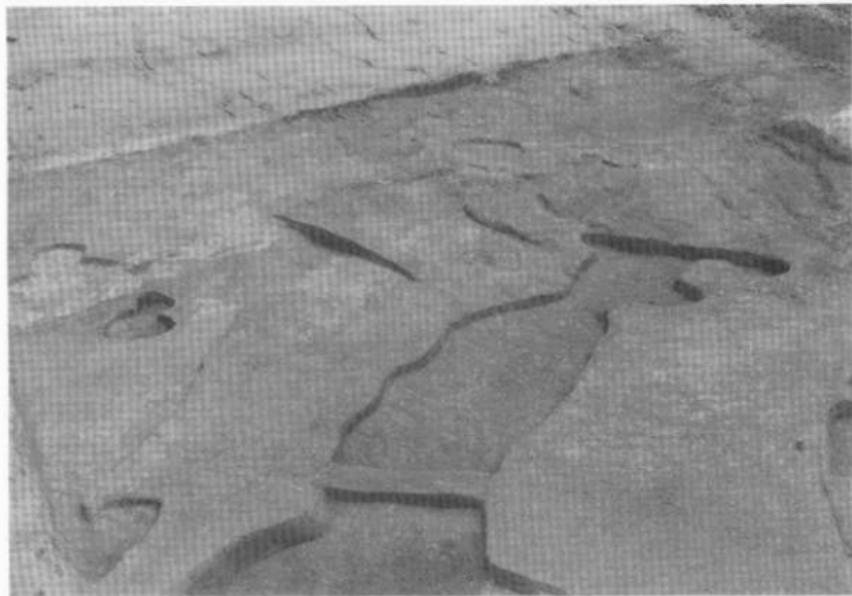
2 4号溝と杭列（北東から）



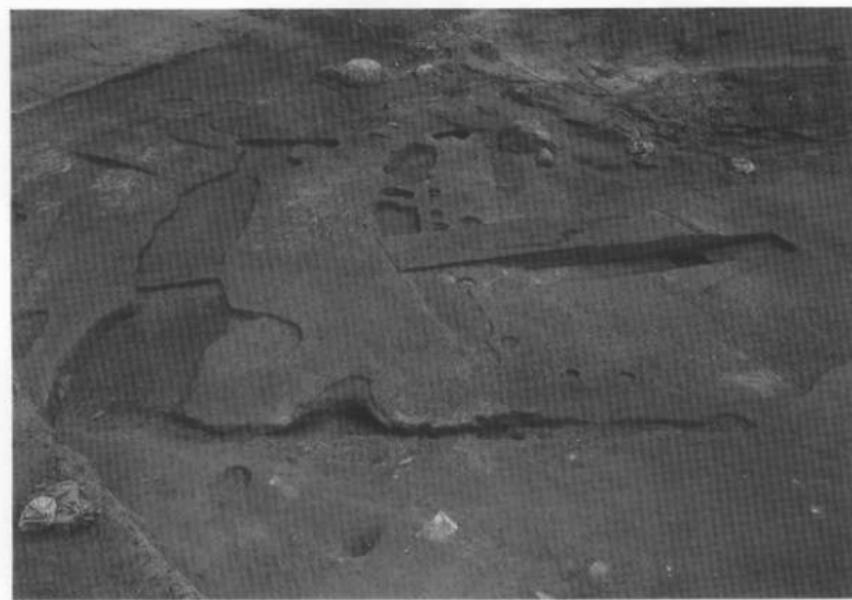
1 4号溝内杭列（北から）



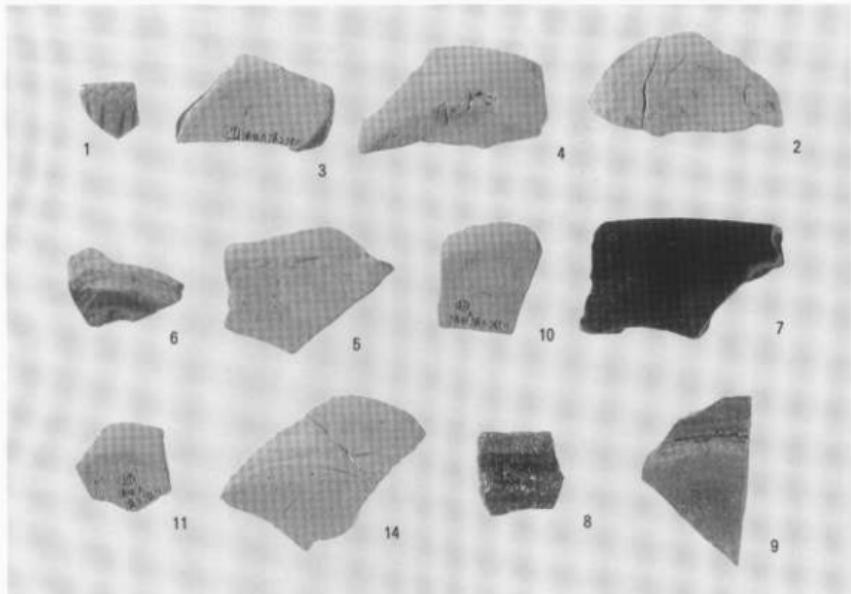
2 発掘区北端部全景（北から）



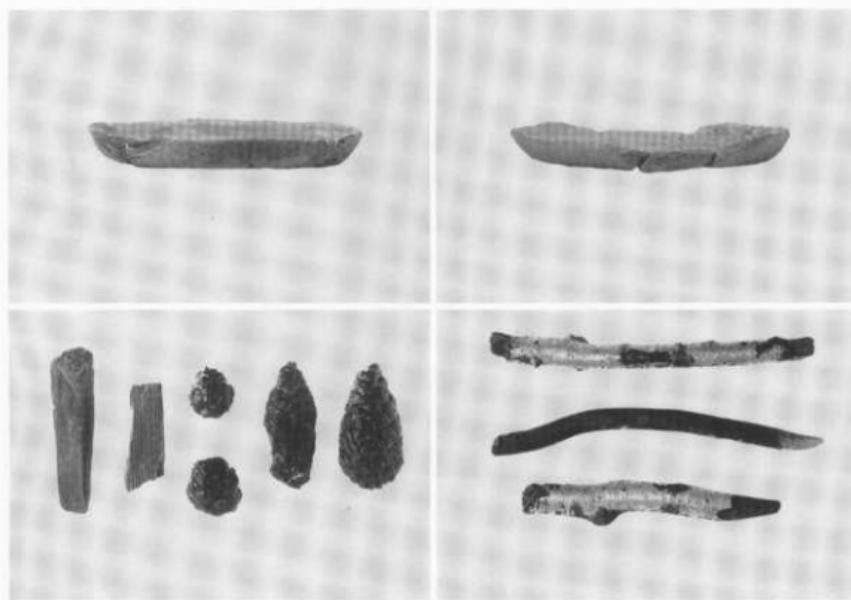
1 5号溝全景（北東から）



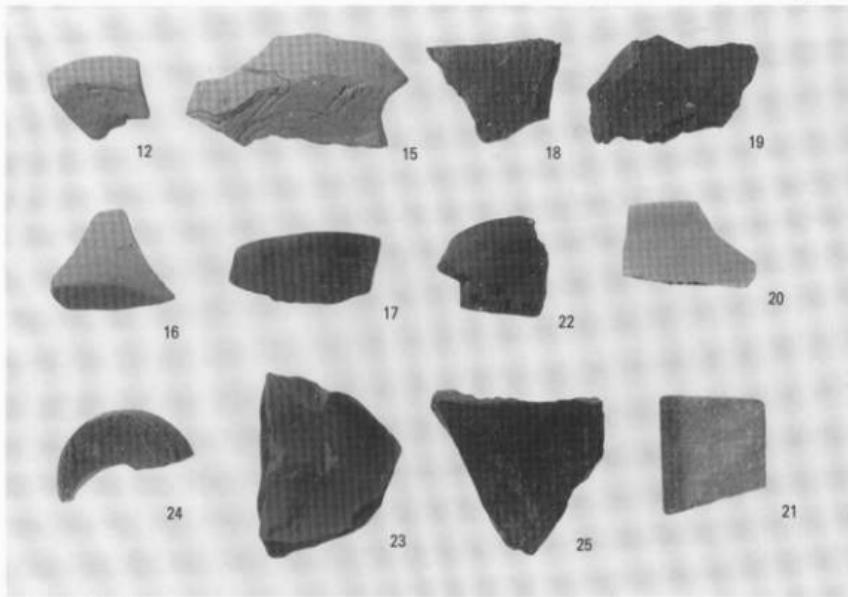
2 6号溝全景（北から）



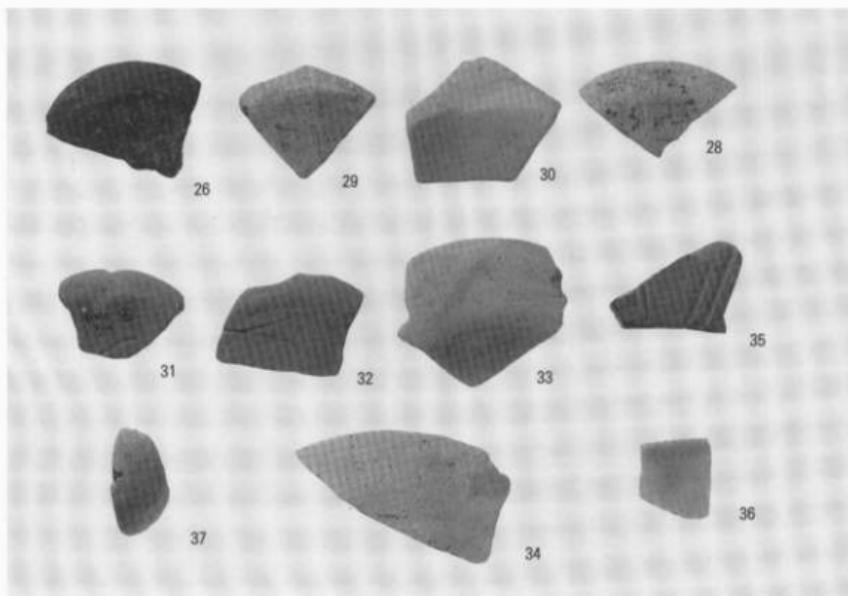
1 溝出土土器①



2 溝出土土器・木器・木の実



1 溝出土土器②



2 溝出土土器と表採資料



1 浦ノ田B遺跡発掘区全景（南西から）



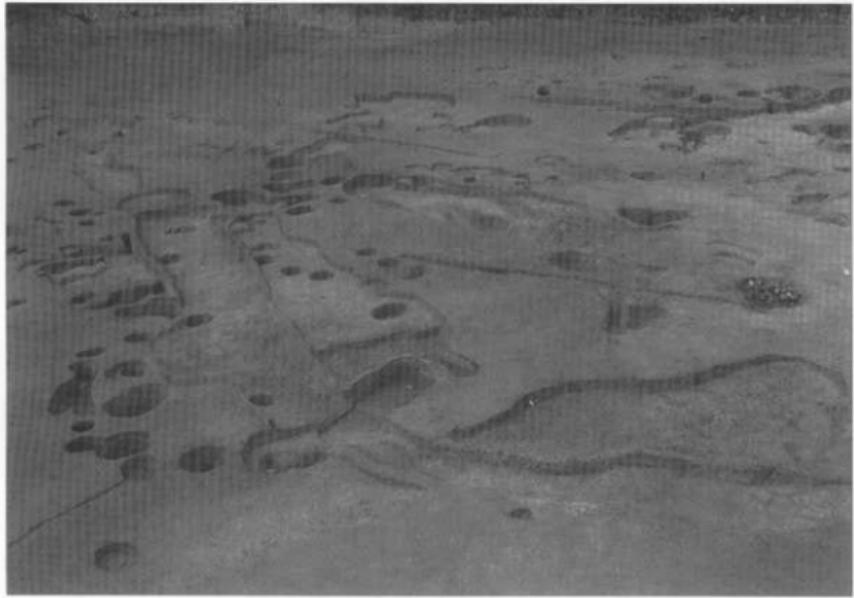
2 浦ノ田B遺跡発掘区近景（南西から）



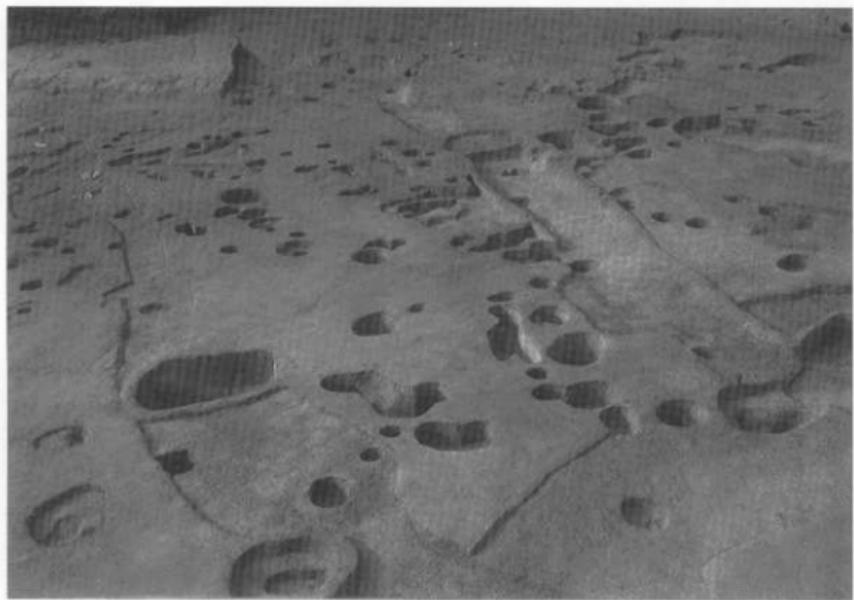
1 発掘区東端部全景（南東から）



2 発掘区中央部全景（南東から）



1 2号溝全景（東から）



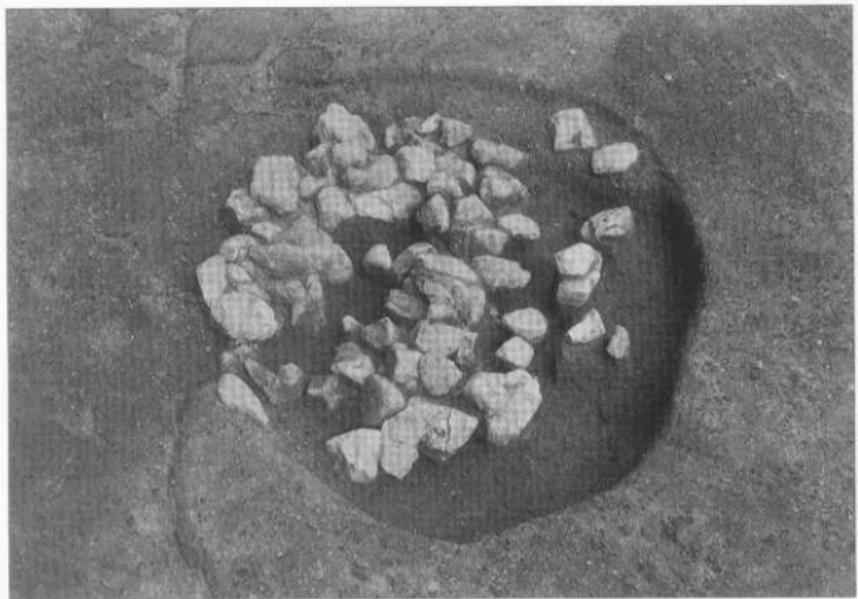
2 2号・4号溝（東から）



1 4～6号溝と5号掘立柱建物（東から）



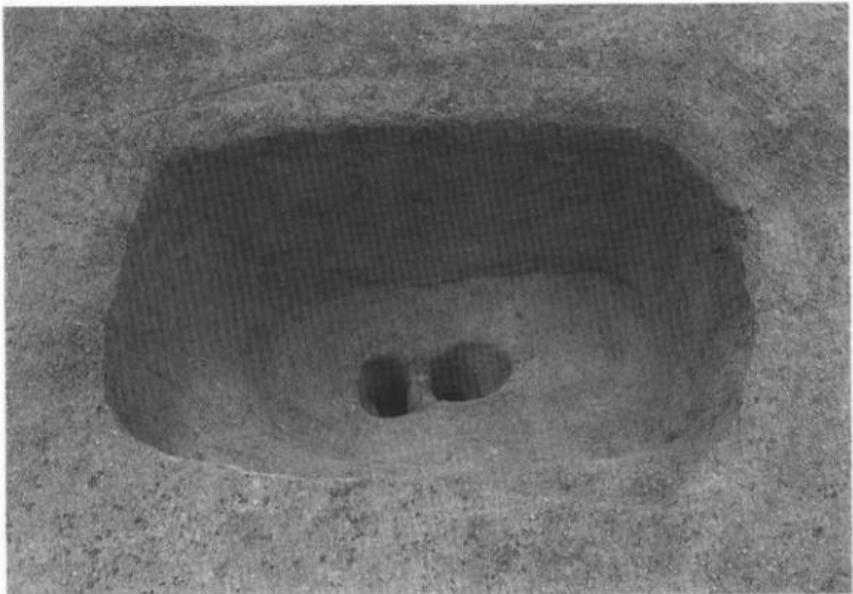
2 1号集石跡（南から）



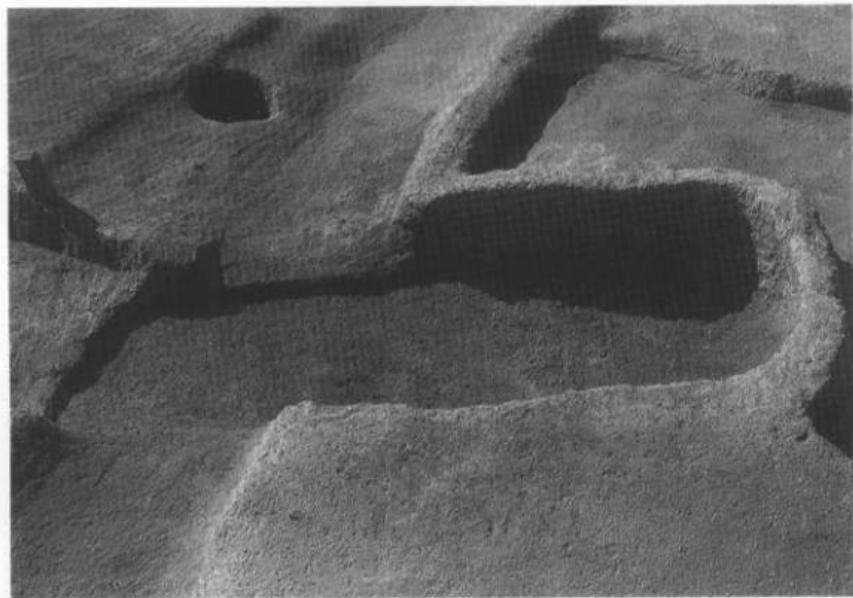
1 2号集石炉跡（南西から）



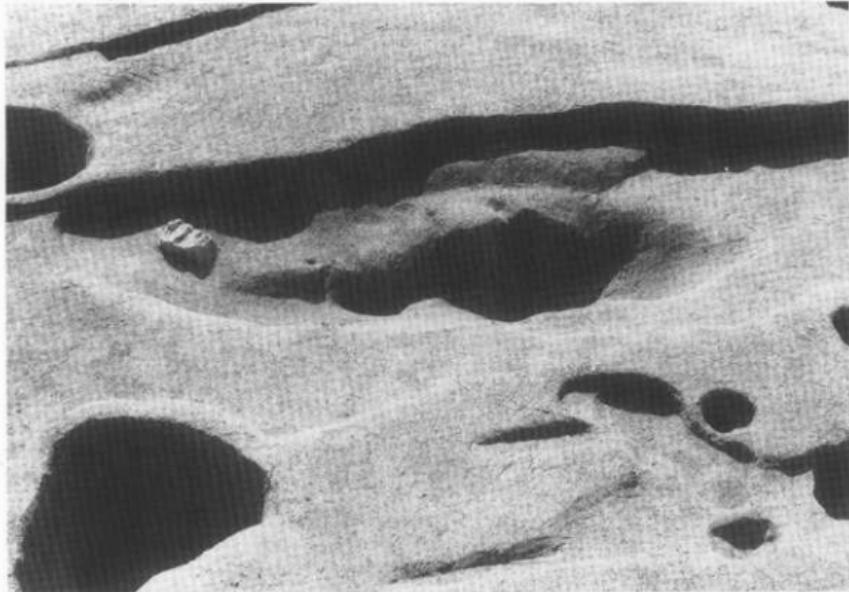
2 3号集石炉跡（東から）



1 落とし穴遺構（西から）



2 1号土壤（東から）



1 2号土壤（北から）



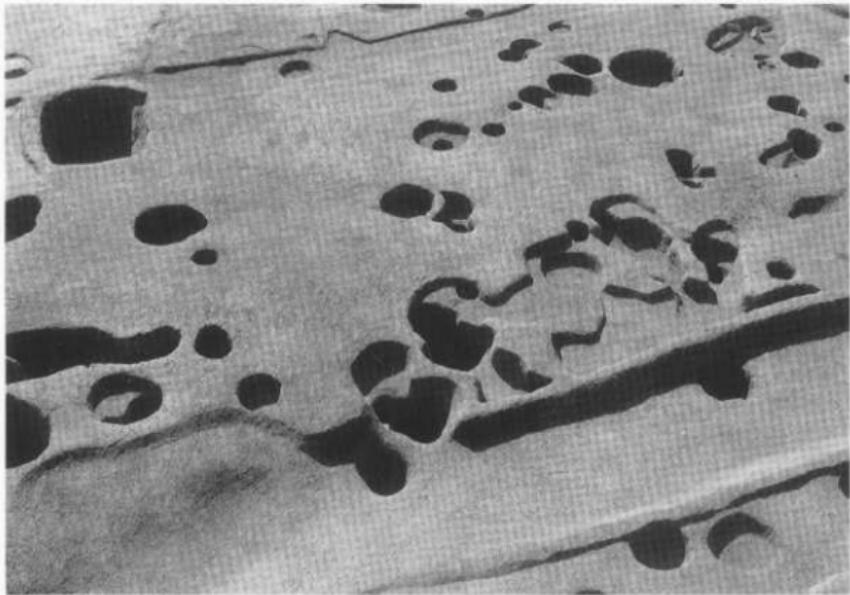
2 3号土壤（南東から）



1 1号掘立柱建物跡（南から）



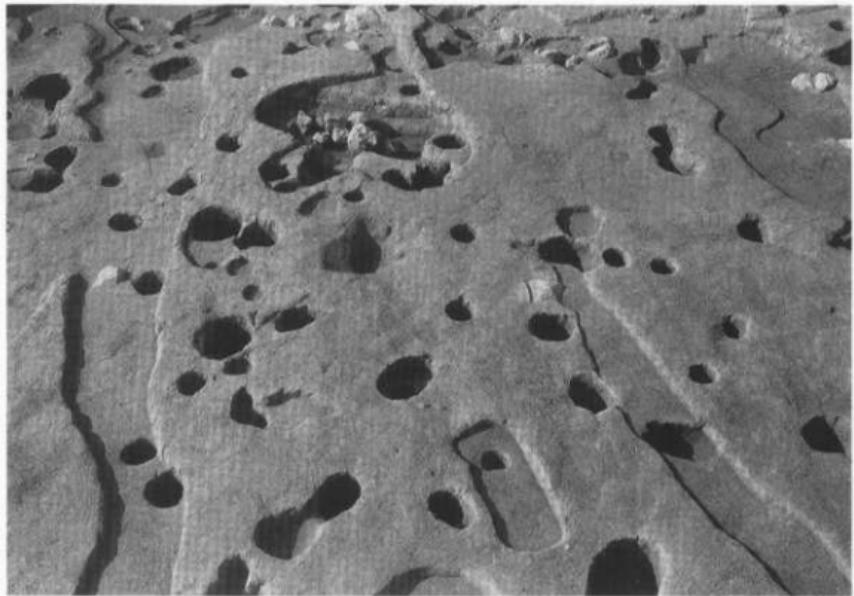
2 2号掘立柱建物跡（南東から）



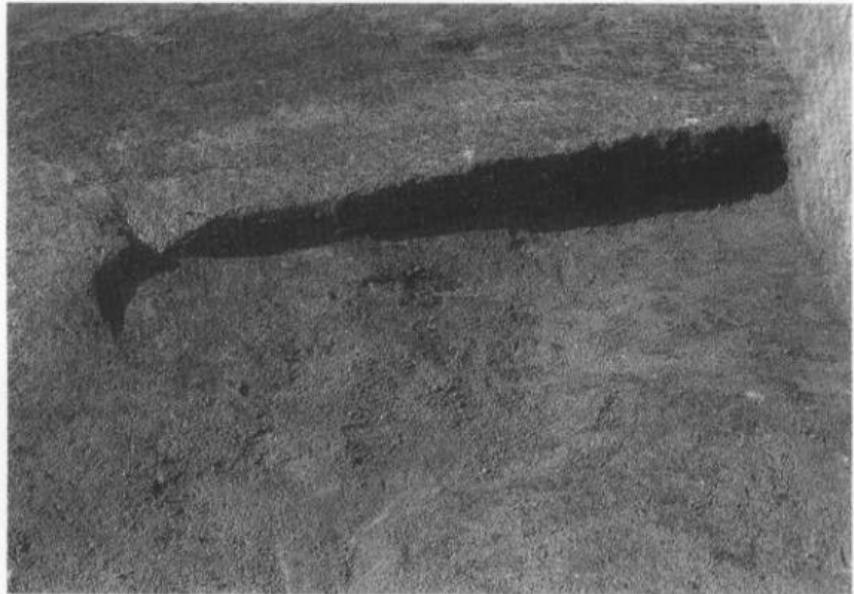
1 3号据立柱建物跡（北から）



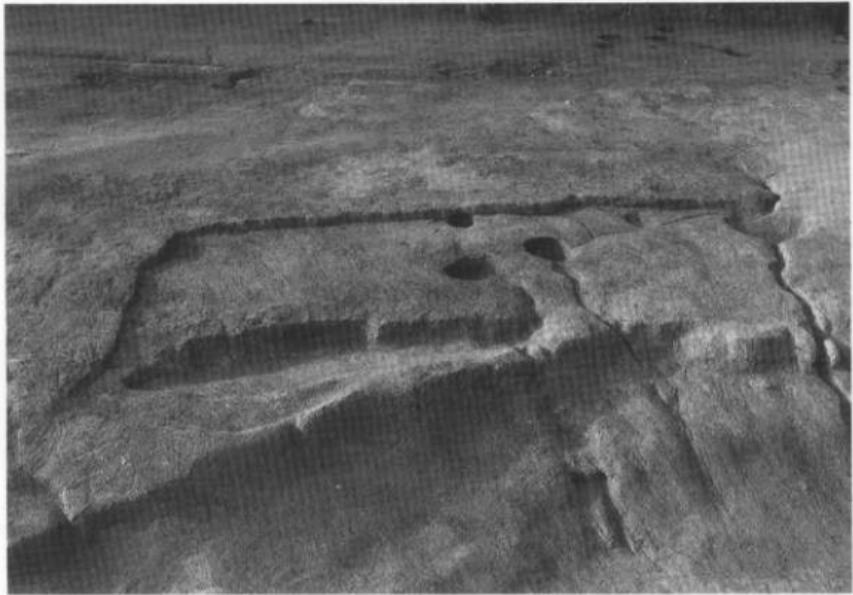
2 4号据立柱建物跡（南から）



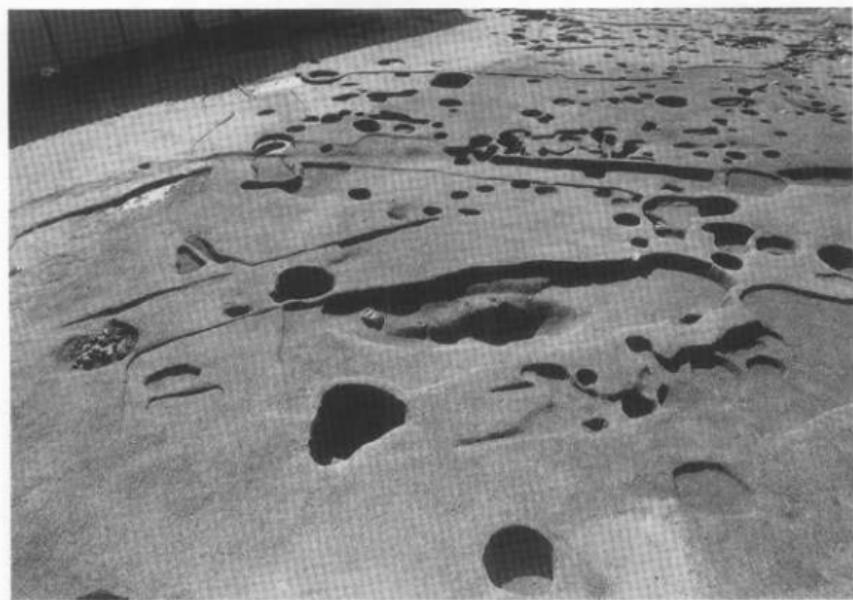
1 5号掘立柱建物跡（南東から）



2 1号堅穴（東から）



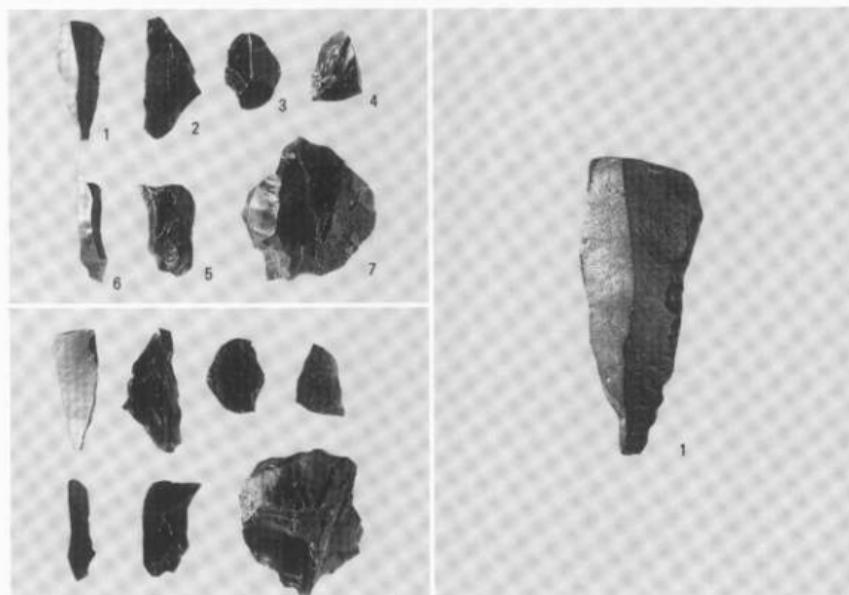
1 2号堅穴（東から）



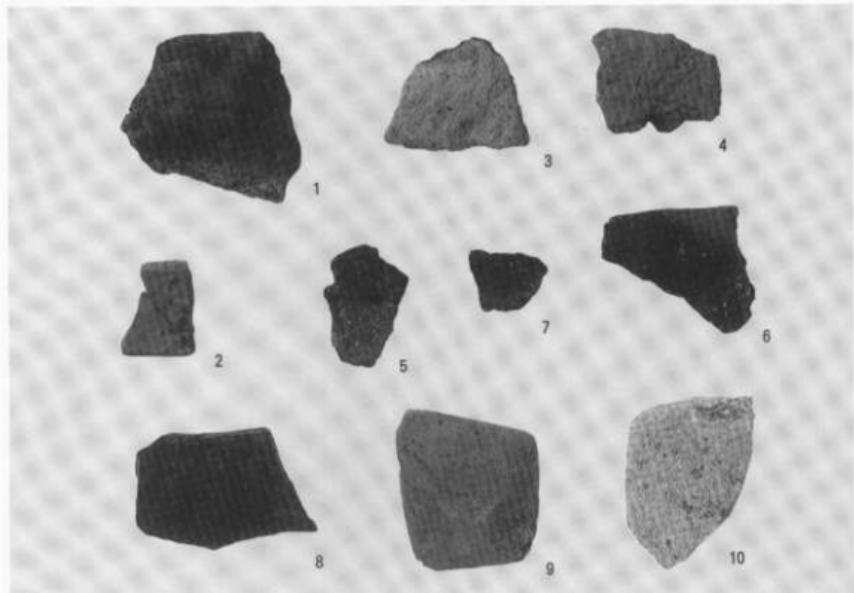
2 大形土壙（北から）



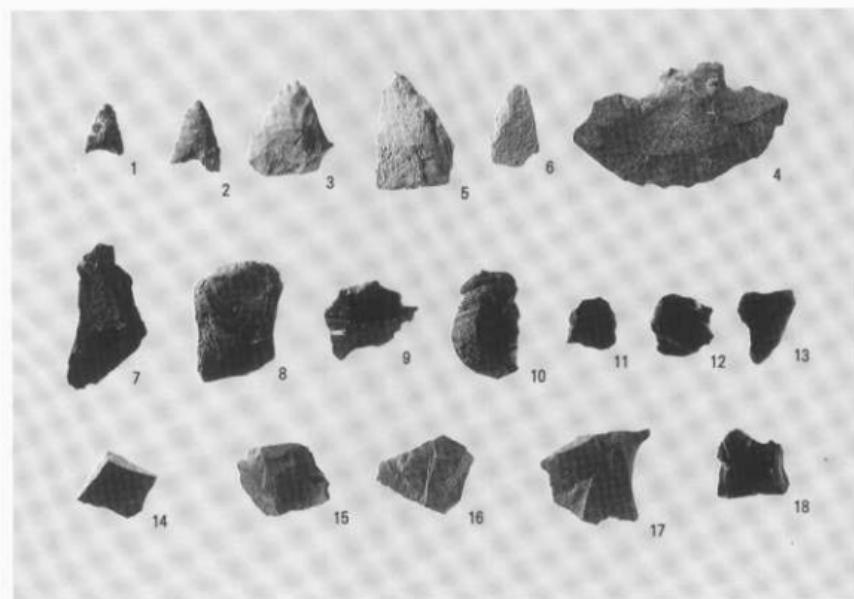
1 1号溝と溝1～3土層断面（南西から）



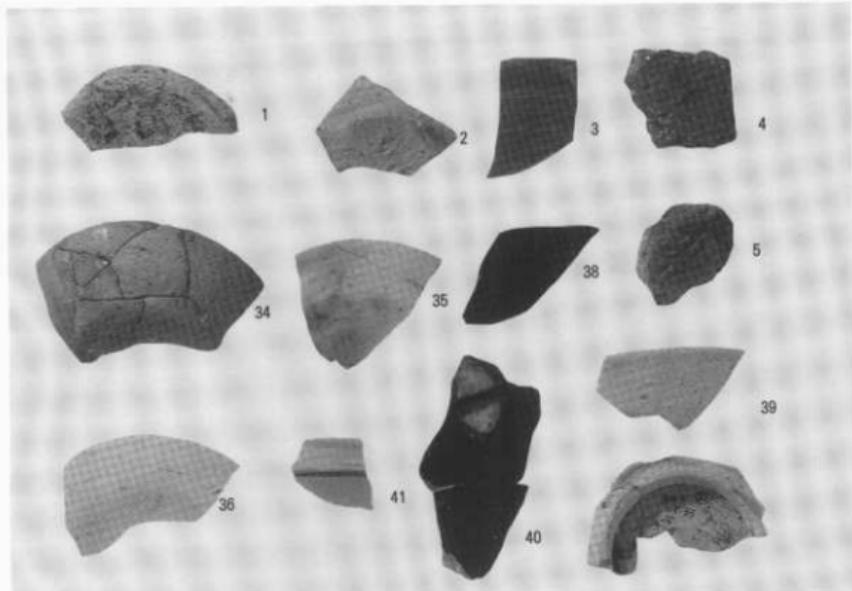
2 旧石器時代の石器・研磨したナイフ形石器の拡大



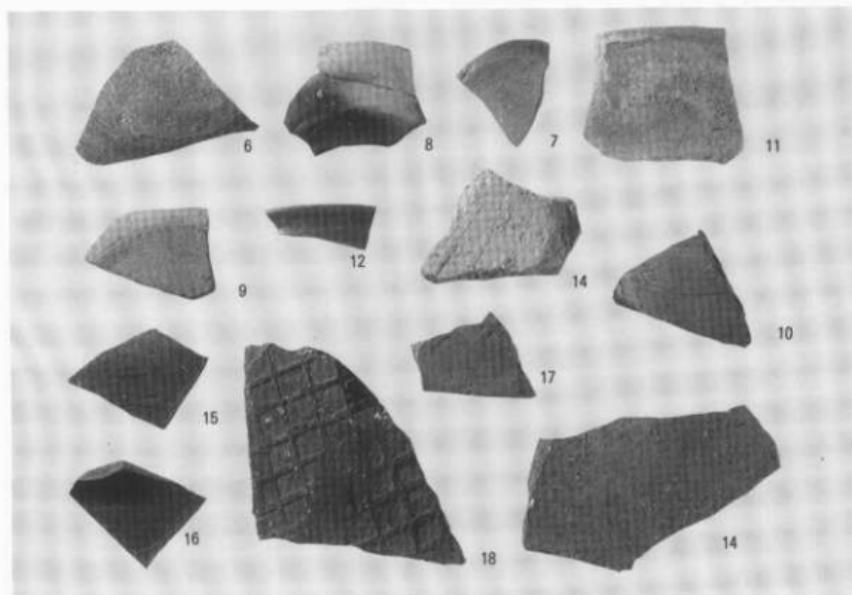
1 繩文土器と石器



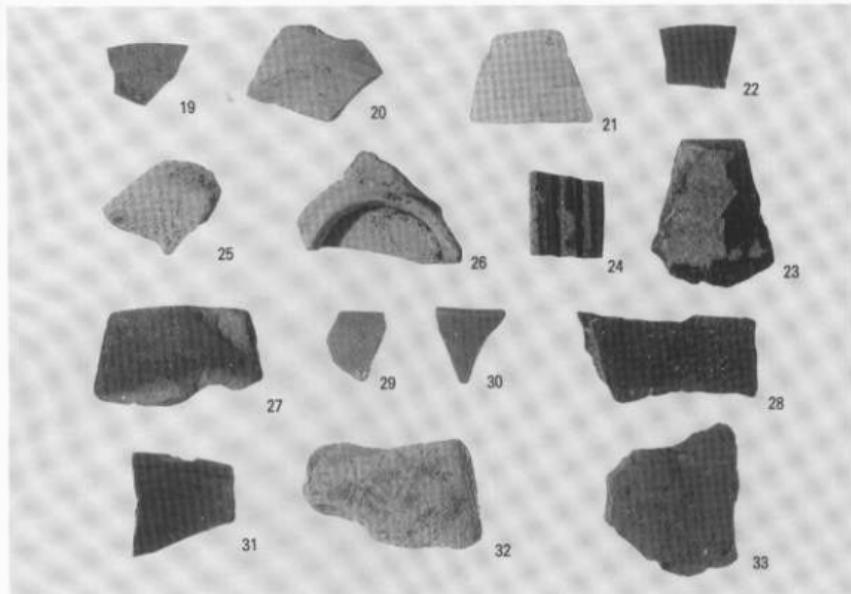
2 繩文時代の石器



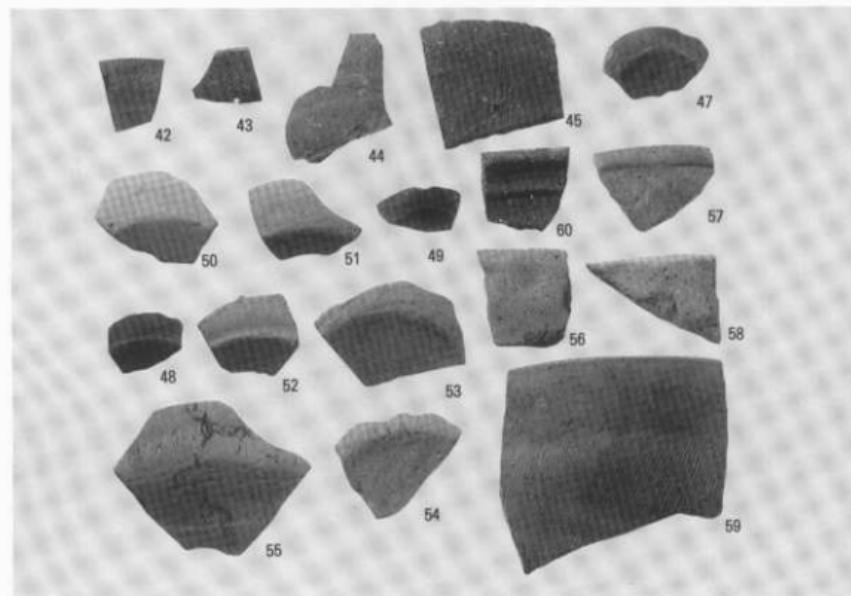
1 大形土壤・ビット出土土器



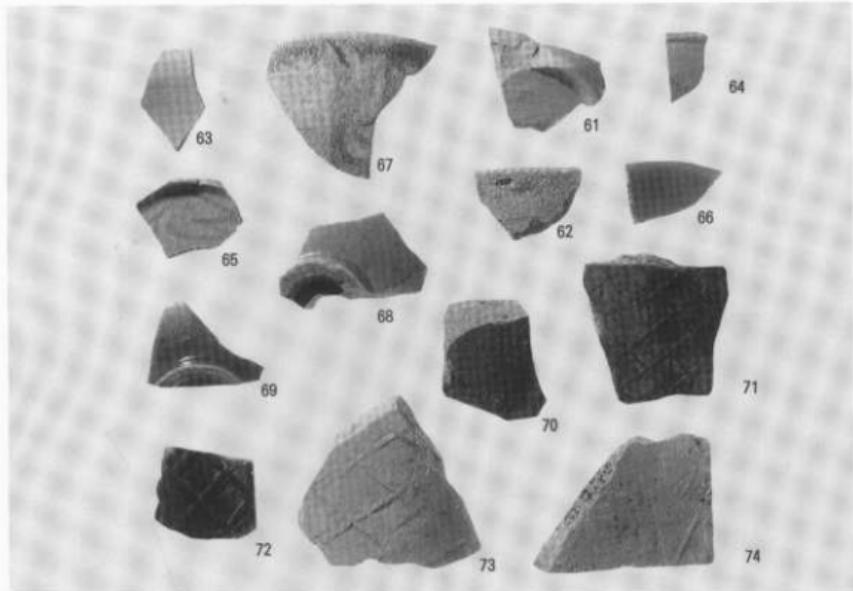
2 溝出土土器・瓦①



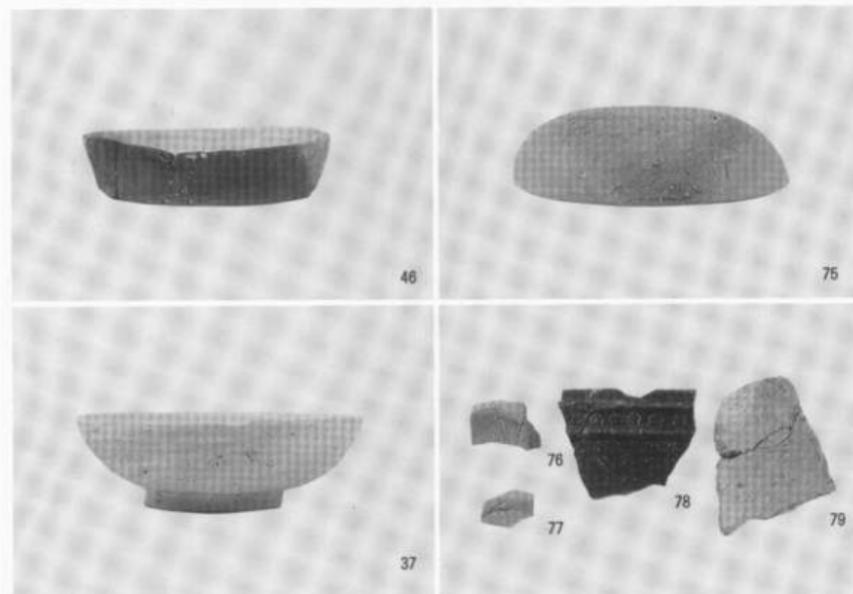
1 満出土土器・瓦②



2 包含層出土土器



1 包含層出土土器・瓦



2 ピット及び包含層出土土器

報告書抄録

ふりがな	うらのだ いせき							
書名	浦ノ田A・B追跡							
副書名	-九州国立博物館建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査-							
卷次								
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第126集							
編著者名	井上裕弘							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812 福岡県福岡市博多区東公園7-7 TEL 092-641-2903							
発行年月日	西暦 1996年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
浦ノ田A遺跡	福岡県太宰府市石板4丁目939-2	40221	210159	33° 0' 54"	130° 32' 39"	1985. 8.28 ~10. 5	2500	国立博物館建設予定地
浦ノ田B追跡	"		210160	133° 1'	130° 32' 45"	1985.10. 6 ~11.15	2500	
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
浦ノ田A遺跡	集落跡	鎌倉時代	土壤溝	1基 6条	土師器・須恵器・磁器 瓦・木器			
浦ノ田B追跡	"	繩文時代	集石炉 落とし穴 土壤	3基 1基 3基	押型文土器 石器			
	"	中 世	堅穴造構 獨立柱建物 大形土壤溝	2基 5株 1基 9条	土師器・須恵器・瓦器 磁器・陶器・瓦			

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 7	登録番号 4

浦ノ田A・B遺跡
福岡県文化財調査報告書 第126集

平成8年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷 セントラル印刷株式会社

福岡市中央区大宮1丁目5番13号